76-265

人格之養成

全

明治
40 8 19
内交

緒言

一、人の人たるの道は唯だ其人たるを知り其人たるを行ふにあり、古の賢王は毎に侍者をして「汝も亦其人たるを記憶せよ」の語を吐かしめて省察の工夫とし教家の千言万語も其要とする所は人たるを覺らしむるにあり、蓋し人の眼は高く天を望むべくも、其足は常に地を離れず、一面は神に向ふも他面は獣に接す、其神を望むの性能を發揮せしめて其獣たるの慾情を制し、歩々向上の大道を辿らしむるは人格の養成の要にして一切の學術一切の道德一切の宗教も亦此に其根底を置かざるはなし、著者自ら惴らず、敢て人格の養成と題し此縷々數千言を著す、淺薄の見、多く肯綮を失し、卑近の論、識者の笑を買ふに過ぎざるべしといへども初學若し之れにより、て反省の資を得るあらば著者の望は則ち足る。

一、人格の養成を根底として書を讀み、人に接し、時に自然を觀ず、其見聞覚知する所のもの皆以て吾人を啓發するに足る、之れを之れ實學の

工夫といふ、唯だ空理を講じ空談を事とし、躐て之れを己に求むるなくんば讀書万卷亦終に無用の閑事業たるべし、讀者請ふ之れを己に切にするを忘れずんば片々たる此一小冊子の中にも亦讀者の修養を資するものなくんばあらず、之れ敢て不遜の言にあらず予の云ふ所の淺薄卑近なる前述の如しといへども、本書多く古聖先賢の教訓を引用したるが故に、瓦礫の如き文中時に金玉の聲を放ち讀者の心胸に觸るゝもの二三にして止らざるべきを信すればなり。

一、人格の事、學者專門の研究を要す、本書は難を去り易に就き繁を捨てゝ簡を取り、主として其養成法を示したるに過ぎず。

一、予の前著冥想論、死生觀、運命觀、英雄史、宇宙論等皆な此人格の養成を主眼とす、今本書を著すに當り務めて其重複を避けたりといへども所論の順序として時に前論を反覆する事少からず之れ本書を獨立せしめんとするに於て免れざるの結果なりといへども事、多く予の思想の狹隘にして取材の多からざるに因す、讀者請ふ深く咎むる勿れ。

一、他に向て人格の養成を說くも自ら省みれば粗懶放縱、本書稿し了て慚愧の情に耐へず、遲れたりといへども予も亦自ら修め自ら奬まん哉。

丁未孟夏

著者識

目次

上　人とは何ぞ

一。緒言……一
神の子か……獸の子か……天地の心……最上者……
寓言……滿足せざる人間
二。古代民俗の人類觀……五
一個の謎……天地開闢……ポルヲシヤ……彼斯……
猶太……スカンデナビヤ……支那……印度……人類
の創造
三。人性善惡說……一四
哲學的解釋……中世哲學……孔子孟子の性善說……

荀子の性惡說……善惡混淆說……三品說
四。人の價値……二〇
原人論……小乘敎……大乘敎……一乘顯性敎……
陸象山……朱子の氣質と本然……王陽明の良知良能
五。近世科學人類觀……二八
人類の概數……人類の區分……一源か多源か……原
人の狀態……人猿同祖……不用器官……人と動物……
生物始源

中人格論

一 人格の意義……四二

道德家の見解……法律家の見解……心理學者の見解……
自我の意識……統一性……主宰性……自由意志說……

トルストイ
二。人格の根底……五一
個性……遺傳……本能……稟性……多血質……
神經質……膽汁質……粘液質……普遍遺傳と特殊遺
傳……自然の影響……社會狀態……家庭の感化
三。自我の觀念……六七
五蘊……自我の存在……意識の過程……自我の分類
……眞我……主我客我……個人的自我……社會的自
我……宇宙的自我
○四。性格の變換……七四
○性格と品位……人格の變換……自然的變換と人爲的變
換……習慣の養成……懺悔……悔改……罪惡の自

覺……懺悔の困難……懺悔の二類……自ら救ふの力
罪惡の動機……社會の罪

五。人格の感化……九一
應化と類化……先覺と頑固……個人の勢力……英雄
と凡俗……社會と英雄……天才……自信力……典
型としての偉人……宗教と人格……人格の不滅

下　養成法

一。修養の時代……九八
教化機能……教育と修養……人生の春……青年の危
機……逆境の恩寵……逆境と偉人

二。常識の涵養……一〇五
教育は投資にあらず……修養の三方面……常識と學識

常識と妄識……常識涵養としての讀書……常識涵養の
捷徑……社會觀察……人を知る

三。趣味の啓發……一一三
無用の用……人生の趣味……美の分類……趣味の高
下……耳目の趣味……主我的と愛他的……人爲の趣
味と天然の趣味……文藝の趣味……讀書の趣味

四。意志の鍛錬……一二一
意志の力……不動心……安心……克己……不動智……
般若……冥想……習慣力の養成……勝海舟の膽力養
成……効過格……發心決心相續心……宗教的修養……
信仰

五。處世と人格……一三四

目次

超世脫俗……同情的生活……商家の道……安田翁の話……至誠……假面は永く蒙り難し……追從輕薄……雲接大師……簡易生活……一生の使ひ方……簡易なる思想……規律的生活……金錢の收支……金錢と獨立……處世の修養

附錄　讀書と自然

一。自省箴……一四九
二。處世箴……一六一
三。自然の趣味……一六五

（目次）終

人格の養成

加藤咄堂著

上　人とは何ぞ

一　緒言

人とは何ぞや。問ふものも人にして答ふるものも亦人。人にして人を疑ひ、人にして人を解く、天下これより明白なるはなく、亦之より曖昧なるはなし。自ら稱して萬物の靈と呼ぶ、然かも其靈なる所、何れにかある。飛翔は鳥に及ばず、馳驅は獸に如かず。橫目縱鼻、日夜營々として衣食の爲めに四肢五體を勞す。これ豈に人の漫に他に誇り得べき所以ならむや。古はいふ、人は神の子にして獸に落ちつゝあるものなりと、今

◎人とは何ぞ

はいふ、人は獣の子にして神に向て進みつゝあるものなりと。向上か、墮落か、一半はこれ神にして一半は獣、ポーロはいふ。

肉の慾は靈に逆ひ、靈の慾は肉に逆らい、此二の者相戻る

と、肉は獣にして靈は神、若し其神たる所以を説けば、

人は天地の心、五行の端なり（禮記）

夫れ天地の間に人と爲るは最上者にして、一切萬物より貴し、人は眞なり正なり、心に虚妄なく、身に正眞を行ふ（八陽經）

と云ひ得べく、又

人は世界の太陽にして實の太陽にも勝れり、彼れの驚くべき心の靈火は光明なり温熱なり（エマーソン）

とも云ふべけれど、其獣たる行動を見んか、何人も、何れに正眞あり、何れに靈火あるかを疑はざるを得ざるべし。目に觸るゝ所のものは呑噬の狀にして耳に聽く所は叫喚の聲に外ならず。神か獣か、眼は高く天を仰ぐべきも、足は終に地を離るゝ能はず。妙なる哉、人、怪なる哉、人、

若し人といふもの今は無き世にて、神代にさるものありと記して、その人といひしもの、ありしやう、まづ上つかたに首といふ所ありて、その左右に耳といふものありて、もろ〳〵の聲をよくきゝ、おもての上つ方に目といふもの二つありて、よろづの物の色かたち殘るくまなく見あきらめ、その下に鼻といふものありて、物のかをかぎ、又下に口といふものありて、おくより聲の出づるを唇を動かし舌をはたらかすまゝに、その聲さま〴〵に變りて詞となりて、萬の事をいひわけ、又首の下の左右に手といふものありて末に岐ありて指といふ、此の指をはたらかして、萬の業を爲し、萬の物を造り出せり、又下つかたに足といふもの、これも二つありて、うごかしはこべば、百里の山をものぼりこえて、いづこまでもありきゆきつ、かくて又胸の内にかくれて心といふものゝありつる。こはあるが中にも、いと怪しきものにて、色も形もおきものから、上の件の聲をきゝ、目の物を見、口のものいひ、手足のはたらくも皆この心のしはざにてぞありけるに、この人と

◎諸言

◎人とは何ぞ

いひしもの、ある時、いたくなやみて、やう〳〵に重りもてゆくほどに、つゐにかの萬のしはざ皆なやみて、いさゝかうごくこともせずして止みにきと記したらん書を、儒者の見しらむには、例の信せずして、神代ならんからに、いづこのさるあやしき事かあるべき、すべて〳〵、理もなくつたなき寓言にこそあれとぞいはむかし（玉勝間）

と、こは本居宣長翁が神代の傳説を擁護せんとて諷刺的に書き記されたるものなれど、試みに人類以外に超絶して、人とは何ぞやの解決を企てんか、直に一種の寓言を解くの感あるべし。吾人は敢て明白に之れが解決を企つるとは云はず、唯だ吾人の望む所は人をして獸たるの醜態を免れしめんとするにあり。ジョン、スチュアード、ミルはいふ、

予は滿足せる豚とならんよりも滿足せざる人間たらんことを欲す。

と、如何にして人たり得べきか、人となりて而して後、神に向ふべし、請ふ先づ人に對する古今觀想の變遷を一瞥して、徐ろに人格の養成に入らむ。

二　古代民俗の人類觀

人生は一個の謎にして人は其の主題たり、而して之れを解せんと企てつゝあるものも亦人なり、人は之れを企てゝ天地の始源を考へ、宇宙の歸趣を想ふ。一切の神話は之れを基礎として起り、一切の學理は之れを中心として立つ。茫々幾萬年、宇宙は進化し、人類は發達したれど謎は依然として我が前に立てり。其の一部を說き得て得々として眞理此にありと云はむとすれば、他に多くの說き得ざる謎は生じ、謎より謎に、未知より未知に人は不斷に迷ひつゝあり。今を以て往を笑ふ勿れ。來を以て今を見んか、亦或は大に笑ふべきものあらんか。

古代の人類は猶ほ小兒の如く簡單なる說明を以て深奥なる謎を解釋し、之れに滿足して又深く問ふの力なし、其宇宙の開闢を論じ人類の始源を說くも僅かに自己の生土と其國民の創造に過ぎずして、日本書紀神代の卷に

古、天地まだ別かれず、陰陽分れず、渾沌たる雞子の如く、溟涬にして茅を含めり、其の清陽なるものは薄靡(たなびく)て天と爲り、重濁なるものは淹滯して地となるに及び、精妙の合は搏ち易く、重濁の凝はかたまり難し、故に天先づ成り、地後に定り、然して後、神聖其中に生ず

と、これ稍〻宇宙的にして學理的なるものなれど其中に生じたる神を以て我が民族の祖とするに甘んじて廣く地球上の人類に及ぶ能はざりしは確かに古代的神話的なるを免れざりし。古代に於ては何れの國も其生土以外に天地あるを知らず、其民俗以外に人類あるを知らず、自己の眼界の及ぶ所を以て說を立て之れに安んじて又深く究むるの要なく、少しく難解の問題に逢着すれば忽ち「神」なるものを想像して一切の疑團を之れに葬むらとす。南洋ポルネシアに於ては天神タンガラア女神ババと共にあらゆる神を造り、これらの神によりて一切の萬物を生じ、最後に人類を造りしが、神々勞動の汗は流れて海となり、天神其海底の土を釣らんとし糸斷れて陸地を生ず、之れをポルネシヤ群嶋とし、此地に二人の兄弟と

妻女とを送りしも、兄は怠慢にして嫉妬心深く其弟を殺せり、殺されたる弟の子孫は東方の大地に至りて白人の祖となれりと傳へ。バビロニアにては其初めは黑暗と大水とのみなりしが其中に奇怪なる生物ありてナモルカといへる女神これを主宰しぬ、神(名はベル)其女を兩斷して一を地と爲し一を天と爲し、こゝに人類生せしといひ。波斯に於ては善神アヒラと惡神アーリマンとを立て此二神の境界に物質の世界ありて三百六十五日を費して成るといひ、それに六期あり、初めに天と天の光とを造り、次ぎに水、次ぎに陸、次ぎに草木、次ぎに獸類、最後に人を造り、男女一對連理の技より生ず、之れに靈魂を注入したりと說き、猶太民族は、神、初めに、晝夜を分ち、次ぎに天、次ぎに地と水とを造り、第四日に日月星辰を造り、第五日に空飛ぶ鳥と水に棲む魚とを造り、第六日に昆虫家畜並に諸種の獸類を出し、最後に、

我儕に象りて我儕の像の如く我儕人を造り之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に匍ふ所の諸の昆虫を治めんと神其像の如くに人を創造

たまへり、即ち神の像の如くに之れを創造り之を男と女に創造たまへり、（創世記）

と、又いふ

エホバ神、土の塵を以て人を造り、生氣を其鼻に噓入たまへり、人即ち生靈となりぬ。エホバ神、エデンの東の方に園を設けて其造りし人を其處に置きたまへり、

と、更らに北歐スカンヂナビアの神話を尋ねんか。頗る奇拔あるものあり。太古は、氷寒界と火熱界とのみなりしが熱界より熱風吹き來りて寒界の氷を解かすや、其中よりイーミルといふ巨人とアウドンブラと名くる一牝牛現れ出で、巨人は此牛の乳によりて成長し牛は又霜を蒙れる石を嘗めて生く、其石よりブレなる人生れ、これに三人の子あり、其中最も勇悍なるものをオーデンといふ、オーデン等、相謀りて巨人イーメルを殺す、其血は流れて海と爲り、其肉は地と爲り、其骨は岩石及び山嶽と爲り、其頭骨は天と爲り、胸漿は雲と爲り、其眉はアスガルドの墻壁

と爲れりと。之れを支那の傳說に徵するに又相似たるものあり、五運歷年記にいふ。

元氣濛鴻、萌芽茲に始り、遂に天地に分れ、肇めに乾坤を立つ、陰を啓き陽を感じ、元氣を分布し、乃ち中和を孕む、これ人なり。首めに盤古を生ず、死に垂んとして身化し、氣は風雲を成し、聲は雷霆と爲り、左眼は日と爲り、右眼は月と爲り、四肢五體は四極五嶽と爲り、血液は江河と爲り、筋脈は地里と爲り、肌肉は田土と爲り、髮髭は星辰と爲り、皮毛は草木と爲り、齒骨は金石と爲り、精髓は珠玉と爲り、汗流は雨澤と爲り、身の諸虫は風の感ずる所と爲つて黎民と爲る

と、印度に於ては梵天ブラマを以て世界の起源とし、其頭は天と爲り、其足は地と爲り、其心は月と爲り、其眼は日と爲り、其呼吸は空氣と爲り、口よりは波羅門（ブラーマナ）族（僧侶）を生じ、腕より刹帝利（クシャトリヤ）族（武士）を生じ、腹より毘舍（ヴァイシャ）族（商農）、足より首陀（スードラ）族（賤業者）を生せりといふ、其他埃及にてはプターといふ神とネフといふ神とによりて恰も土偶を造るが如くに人類を

創造せられたりといふ等、一々に擧げたらんには天地開闢人類始源の神話を以て此一卷を滿たすも尙は足らざるものあらん。蓋し是等は皆な古代民族が人類なる謎を解かんとして先づ最初に其如何にして生せしかを想像したる片影に過ぎず。漫に其荒唐不稽なるを笑ふ勿れ、これらの中には自ら後世學理發展の萠芽と認むべきものあり。初めに天地あり而して萬物生じ、最後に人類造られたりとするは進化の順序を示せるものにあらざるか。宇宙を以て巨人の死屍とせるは此天地を以て渾然たる大人格の顯現と見る汎神觀の素地を成すものにあらざるか、然れども吾人は今此に斯かる論議を試みるものに非ず。去つて稍進歩したる人類觀を見ざるべからず。そは人類始源の問題にあらずして人類價値の問題なり、古代神話は人類を以て神の造りたりしものとす。然らば神の如く靈能あるべきに卑陋醜汚を事とす、人は如何にして此くの如くなりしぞ、猶太民族の神話は最も人の知悉せる所、

エホバ神の初めに造りたまひし人類をアダムといふ、

エホバ神アダムを深く睡らしめ、睡りし時、其肋骨の一を取り肉をもて其處を塡塞たまへり、アダム言けるは此に我が骨の骨、肉の肉なれば、こは男より取りたるものなれば之を女と名づくべしと、是故に人は其父母を離れて其妻に好合い、二人一體となるべし、アダムと其妻は二人倶に裸體にして恥ぢざりき。

これを男女の創造とす、さて、

エホバ神の造り給ひし野の生物の中に蛇最も狡猾し、蛇、婦に言ひけるは、神眞に汝等園の諸の樹の果は食ふべからずと言ひ給ひしや、婦、蛇に言ひけるは我等園の果を食ふことを得、されど園の中央に在る樹の果實をば神汝等之を食ふべからず又之に捫るべからず恐くは汝等死人と言給へり、蛇婦に言けるは汝等必ず死する事あらん、神汝等が之を食ふ日には汝等の目開け汝等神の如く爲りて善惡を知るに至るを知り給ふなりと、婦樹を見れば食に善く目に美麗しく且智慧から人が爲に慕はしき樹なるによりて遂に其果實を取りて食ひ亦之を己と偕なる夫

に與へければ彼食へり、是に於て彼等の目俱に開きて彼等其裸體なるを知り乃ち無花果樹の葉を綴て裳を作れり、彼等園の中に日の清涼き時分歩み給ふエホバ神の夢を聞しがばアダムと其妻即ちエホバ神の面を遮りて園の樹の間に身を匿せり、エホバ神アダムを召て之に言ひ給ひけるは汝は何處に居るや、彼いひけるは我園の中に汝の聲を聞き裸體なるにより懼れて身を匿せりと、エホバ言たまひけるは、誰か汝の裸なるを汝に告しや汝は我が汝に食ふなかれと命じたる樹の果を食ひたりしや、アダム言ひけるは汝が與へて我と偕ならしめ給ひし婦彼れ其樹の果實を我に與へたれば我食へりと、エホバ神婦に言ひたまひけるは汝が爲したる此事は何ぞや婦言けるは蛇我を誘惑して我食へりと、エホバ神蛇に言給ひけるは汝是を爲したるに因て汝は諸の家畜と野の諸の獸よりも勝りて呪はる汝は腹行して一生の間塵を食ふべし、又我汝と婦の間及び汝の苗裔と婦の苗裔の間に怨恨を置かん彼は汝の頭を碎き汝は彼の頭を碎かん、又婦に言ひ給ひけるは我大に汝の懷妊の劬

勞を增すべし汝は苦みて子を產まん又汝は夫を慕ひ彼は汝を治めん、又アダムに言ひたまひけるは汝その妻の言を聽て我が汝に命じて食ふべからずと言ひたる械の果を食ひしに由りて土は汝のために呪はる汝は一生のあひだ勞苦して其より食を得ん

これを猶太の原罪說とす、人は實に神の命を奉せざりしが爲めに此に罪を得、此に苦を得たりしなり。此神話も亦笑ふべきにはあらじ。吾人は這裏に多くの倫理學說を包含せることを想はずんばあらず。之れを一の譬喩として見るの時、吾人は佛敎の所謂靜穩なる眞如の大海に忽然として無明の風起りて煩惱の波立ち、こゝに罪惡を生ずといへるも其歸を一にするものにあらずや。清淨なるべき人の心にも煩惱あり、神の子たる人の身にも罪惡あり、清か濁か神か魔か、古代民俗既に之れを解く能はず、今の人能く之れを說き得るか。

三　人性善惡說

神の子か、魔の使か、人の眞面目は何れの處にある。暫く宗教的神話を外にして推理的研究を旨としたる哲學に見んか、ソクラテースは人は皆な自ら認めて善と爲し利と爲すことを行ひつゝあるものにて其惡を行ふは過誤に外ならずといひ、プラトーンに至ては此宇宙を以て究竟善たり究竟美たるイデアの顯現とし、人は一個の小宇宙にして其存在に於て宇宙の實在と相聯れるものとしたりしが故に人性を以て善美と觀し、吾等の心の奥に微けき光の存するは此イデアを戀ひ慕ふの情なりといひ、アリストートルは人と他の動植物とを區別し、人の人たる所以は其職とする所を盡すにありといふ、人の人たる職とは何ぞ、徒に營養と生育とを計るは植物も亦之を爲す、妄りに感覺的生活を事とするは他の動物と異るなし、要は本然の理知に從うて行動するに在りとし、共に人は他の動物と異なる價値の存することを認めたり古代、

基督教哲學の起るに從ひ、神話と哲學とは混淆して、アウグスチーヌスの如きは、人は其祖アダムの時代に於てのみ清淨の者なりしが、アダム既に魔の誘ひに遇ふて惡を選びしより吾人は未生以前に罪障の染汚を受け子々孫々相傳へて罪の子たるを免れずといひ、唯神の恩寵と基督の賠償とによりてのみ滅罪の期あるべしと說き以て神學の根底と爲しぬ、されば此時代の基督教徒は人間社會を以て惡魔の府とし、肉身を以て罪障の源と觀じ、唯だ靈のみ神より與へられたる特寵と認め、此靈能を全からしめんには肉身を厭離し、敵視するを以て其當を得たるものと思惟し、排肉身觀は斷食となり苦行となりて彼等が信仰を鼓吹するの力と爲りぬ。支那に於ては夙に性善惡の論盛にして、孔子は

我れ性の善を云はんと欲す、されども、人の善に放任して惡たらんことを恐る。我れ性の惡たるを云はひと欲す、されど、人皆な仁義を以て性を害すと爲し、之れを爲さざらんことを恐る

といひて性の善惡に就ては之れを明言せることなきが如しといへども

「人の生るゝや直」といひ

天蒸民を生ず、物あれば則あり、民の彝を秉るや、此懿德を好む、

此詩を作るものはうれ道を知るか

と爲せるより見れば人性を善なりと認めたるや疑ふべからず。性善說を最も明白に唱道したるものを孟子とす。曰く

人の性、善なること猶ほ水の下に就くが如し、水は搏て之を激せば山にも上らしむべしといへども、これ水の性に非ず、人不善を爲さしむるを得べきも之れ人の性に非ず

と、更らに四端の說を擧げて之れを明にして曰く

人皆な人に忍びざるの心あり、今人、孺子の將に井に入らんとするを見れば、皆怵惕惻隱の心あり、交を孺子の父母に求むる所以にあらず、譽を鄉黨朋友に要むる所以にあらず、其聲を惡みて然かするにも非ざるなり、是に由りて之れを觀れば惻隱の心なきものは人に非ざるなり、羞惡の心なきものは人に非ざるなり、是非の心なきもの

は人に非ざるなり、惻隱の心は仁の端なり、羞惡の心は義の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端なり

と又いふ、

人の學ばずして能くするものは其良能なり、慮らずして知るものは其良智なり、孩提の童子も其親を愛するを知らざるなし、長じて其兄を敬するを知らざるなし、

と、之れに反對せるものを荀子とす、曰く、

人の性は惡なり、其善は僞なり、人生れて利を好み、嫉惡あり、耳目の欲あり、故に人の性情に從へば爭奪生じ、文理滅す、之れに由りて性の惡なるを知るべし、拘木、檃括烝矯を待ちて然る後、直く

人、師法を待ちて後正しく、禮義を得て後治まる、

と、又いふ、

凡そ天下の所謂善とは正理治平なり、所謂惡とは偏見悖亂なり、今人性固より正理治平ならんには、惡んぞ聖王禮義を用ゆるあらんや、

聖王の禮義ありとも、何の用にか正理治平に加へん。

と、更らに喝破して、

若し人性善ならば聖王を去り禮義を止めよ、性惡ならば聖王を興し禮義を貴べ

と、彼れにも理あり此れにも非なし。人性は善か惡か、薫仲舒に至て

は性は質なりとし善惡混ずと見る。

禾は米を出だすと雖、禾未だ米と云ふべからず、性は善を出だすと雖、性未だ善といふべからず、繭に糸ありと雖、繭は糸に非ず卵に雛ありと雖、卵は雛に非ざるが如し性善には非ざるなり、性は禾なり卵なり繭なり、卵は復を待ちて後、能く雛となり、繭は繰を待て後よく糸となる、性は教訓を待ちて後、能く善なり、善は教誨の然らしむる所なり、質樸の能く至る所に非ざるなり

といひ、楊雄も亦

天生民を生ず、倥侗顓蒙にして性善惡混ず、其善を修すれば善人たり、其惡を修すれば惡人たり

といふ、韓退之は性と情とを分ち性は生と俱に生ずるものにして、之れに上中下の三品あり、上なるは善、中なるは導て上下せしむべく、下なるは惡なりとし、情は物に接して生ずるもの、こも亦三品ありと說く、其門に李翺あり、其說を祖述して

人の以て聖人たる所以のものは性なり、人の以て其性を惑はすもの、は情なり、喜、怒、哀、懼、愛、惡、欲の七つのもの皆な情の爲す所なり、情既に昏く、性斯に匿る、性の過に非ざるなり、水の渾するや其流清からず、火の烟るや其光、明ならず、水火清明の過にあらざるなり

と、かくて性善惡論は支那思想史上の一大美觀となり、終に朱德理氣の說に至て大成せられぬ、朱儒理氣の說は印度佛敎の思想を調知したるものにして、略ぼ近世哲學の趨勢と合致すべきものあり、性善性惡か、抑も亦善惡混淆か、性善にして情惡なるか、請ふ更に此論を續けしめよ。

四　人の價値

人とは何ぞやの問題に對し東洋在來の知識を一括して之れが答解を試みたるものを宗密禪師の原人論とす、彼れは萬靈の蠢々たる皆な其本あり、萬物の芸々たる各其根に歸す、未だ根本なくして枝末あるものは非ざるなり、況んや三才の中唯だ人最も靈にして而も本源なからんや、且つ人を知る者は智なり、自ら知る者は明なり、今我人身を稟け得て自ら從來する所を知らずんば、曷ぞ能く他世の所趣を知らんや、曷ぞ能く天下古今の人事を知らんや、故に數十年の中、學に常師なく、博く內外を考へ、以て自身に原ね、之を原ねて已まず、果して其本を得たり」と稱し、先づ儒道二敎の原人說を駁し、小乘より大乘に入り終に自己の所信たる實大乘の敎說を縷述せり、其論ずる所、今日より之を見れば稍々偏執の感なきにあらずと雖も、東洋在來の學說を一瞥するに於て最も便なるものあれば左に其要を摘みて之が批評を試みん。

論四篇あり、一を斥迷執といふ、蓋し儒道二敎の所說を排斥せるものなり。曰く

儒道二敎、人畜等の類を說きて皆な虛無の大道より生成養育すといひ、道は自然に法つて元氣を生じ、元氣、天地を生じ、天地萬物を生ず、故に愚智・貴賤・貧富・苦樂皆な天に稟け時と命とに由れり、故に死後却て天地に歸し虛無に復す、然も外敎の宗旨、但だ身に依て行を立つるに在りて身の元由を究竟するにあらず、說く所の萬物象外を論せず、大道を指して本と爲すと雖も、備に順逆起滅染淨の因緣を明さず

と、これ儒の混沌の一氣別れて陰陽の二となり、二、天地人の三を生じ、三、萬物を生ずと說き、老子の「物あり混成す、天地に先ちて生ず、寂たり寥たり獨立して改めず、周行して殆うからず、以て天下の母となるべし、吾其名を知らず、之を字して道といふ、强て之が名を爲して大と爲す」といひ、莊子が「虛無無爲は萬物の本なり」といへるを評せる

ものにして徒らに大道を說て明に大道と人身との關係を示さゝるを笑ひ、更らに二の斥偏淺に入り、佛敎中に人天敎、小乘敎、大乘法相敎、大乘破相敎あり、皆お以て偏淺おりとす、初めの人天敎は僅かに三世因果を說き前生の業によつて此人身を稟け得るなりと示して未だ其業の根本を究めず、小乘敎に至りては其業を訪ねて、

形骸の色、思慮の心、無始なり已來、因緣力の故に念々生滅相續して窮りなきこと、水の涓々たるが如く、燈の燄々たるが如し、身心假に合して一に似たり常に似たり、凡愚覺せず、之れを執して我と爲し、此我を寶とするが故に貪賤痴等の三毒を起す、三毒、意に繫りて身口を發動し一切の業を造る、業成て逃れ難し、故に五道苦樂等の身を受くといふ、

業は梵語にて羯磨(Karma)といひ英語のアクション(Action)といへる如く作業の義をも有す、即ち身口意の作業によりて其報を受け人間修羅畜生餓鬼地獄等の報を受くと爲すものなり、扨又其受け得たる身に就ては、

身は則ち生老病死、死して後復た生ず、

といひ、

切々生々輪廻絕えず終なく始なきこと汲井輪の如し

と說く、これ唯だ我執を以て業の本と爲し、これによりて生死輪廻することをいふて、未だ其我の本原を盡くさず、大乘法相敎に於ては一切の有情、無始已來法爾として八種の識あり、中に於て第八阿釋耶識は是れ其根本にして頓に根身闇界の種子を變ず、轉じて七識を生じて皆な能く自分の所緣を變現し却て實法なし

と示す、八種の識とは阿賴耶識、末那識、意識、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識なり、其中阿賴耶を以て、根本とす、阿賴耶(Araya)は梵語、藏の義、一切萬有の根本所藏なり、萬有は皆な此識の所變、

我が身も亦た爾り、唯識の所變、迷ふが故に我及び諸境ありと執す、此に由て惑を起し業を造て生死窮りなし、此理を諒解すれば方に知るべし、我が身は唯識の所變にして識を身の本と爲すことを、

と、これ純然たる唯心論にして我ありと執ずるも實はこれ識の所變に過ぎずといふなり、大乘破相敎は之れを攻擊して

所變の境既に妄ならば能變の識豈に眞ならんや

萬物は唯だ識の所變にして識以外一物なしといふは可なり、されど其識は何を以て眞なり右なりといひ得べきや、境も妄ならば心も妄なるべし、一切の諸法は是れ空にあらざるはなし

是に知んぬ心境皆な空なる方にこれ大乘の實理なり、若し之れに約して身を原ぬれば身元と是れ空なり、空即ち是れ本なり

と絕對無象、天地一物の存するなし、之れ果して眞理なるべきや、

今復た此敎を詰て曰く、若し心境皆な無ならば無を知るものは誰ぞ

又若し都て實法なくんば何に依て諸の虛妄を現するや、且つ說に世間虛妄の物と見るに、未だ實法に依らずして能く起るものはあらざるなり、如し濕性不變の水なくんば何ぞ虛妄假相の波あらんや、若し淨明不變の鏡なくんば何ぞ種々虛假の影あらんや。

既に影あり實法なかるべからず、此に於て之に直顯眞源の章あり、一乘顯性敎を明し、喝破して曰く、

一切の有情、皆な本覺の眞心あり、無始已來、常住淸淨にして昭々として昧まされず、了々として常に知る、亦は佛性と名け、亦如來藏といふ、無始際より妄想之れを翳して自ら覺知せず、但だ凡質を認むるが故に沈着して夢を結び生死の苦を受く、大覺之を愍みて一切皆空と說き又靈覺の眞心淸淨なること全く諸佛に同じと開示したまふ

と、一切有情に本覺の眞心の昭々了々たるものあるをいひ、

我等多劫より未だ眞宗に遇はず、反て自ら身を原ることを解せず、但だ虛妄の相を執りて凡下に甘認す、或は畜或は人、今至敎に約して之れを原ねて力めて本來是れ佛なることを覺す、故に須く行は佛行に依り心は佛心に契ふべし、本に返り源に還り、凡習を斷除し之れを損ひ又損ひ、以て無爲に至れは自然に應用恒沙なる、之れを名

けて佛といふ、當に知るべし、迷悟同一の眞心なることを、大なる
誤、妙門原人此に至ること

と、終に本來是佛を以て人とは何ぞやの問題を了解したりとし、且つ人の本源を尋ね得たりとするは事頗る早計に類すといへども、本論に依りて吾人は人性問題に於て略ぼ解決を得たるを喜ぶ、禪師は佛敎の根本義により一切有情に本覺の眞心名けて佛性といふべきものあるを認めぬ、而して此本覺の眞心なるものは近世哲學者の所謂宇宙大意識にして、吾人も亦之れを具有すといへるは、吾人の意識を以て宇宙大意識の顯現とし眞我（True Self）の實現を以て倫理の目的とせる自我實現說（Self-realization）と類し行は佛行に依り心は佛心に契ふべしといへるも其撰を一にす。朱儒に至ても亦這般の論あり、陸象山はいふ、

我が心は天の與ふる所にして其內に一切の理を有す、故に內心に思考せば一切の理知り得ざるなし、人の道を知らず、惡を行ふは唯だ思はざる爲のみ、思へば即ち得、心を外に馳せて物を逐ふは、これ

自己の心の主宰たることを忘れたるものなり、畢竟人に惡あるは、これ其心の外物に蔽はるゝが爲めのみ、故に外物の實を去らば心は淸明にして義理自ら存すべし

と、朱子は人の性に本然と氣質との二ありとして

氣には淸濁あり、其純淸なるものは本然の性にして、否らざるものは氣質の性なり

といふ

明德は人の天に得る所、虛靈不昧、理を具へて萬事に應ず、但だ氣質の拘する所、人欲の蔽ふ所となれば時あつて昏し、然も本然の明は未だ嘗て息まざるなり

と說きて性を二に分ち、しかも本然の性を以て宇宙大精神と脉絡相通するものと爲す、降て王陽明は良知良能を說き、

良知良能は愚夫愚婦といへども、聖人と同じ、但だ惟れ聖人は能く其良知を致す、而して愚夫愚婦は致す能はず、此れ聖愚の由て別る

ゝ所なり」

といひ、更らに

良知は是れ天理の昭明靈覺の所、故に良知は即ち是れ天理なり」

と說く、性善惡論は略ぼこゝに歸結を得たり、されどこれ人の價値の問題にして人其者の何たるやを說明するものにあらず、人其者の說明、こは暫く科學に耳を傾けざるを得ず、

五　近世の科學人類觀

人は神の心を具すといひ、人には宇宙精神の片影を寓すといひ、或は目して悉有佛性といふも皆なこれ形而上の觀察にして、心靈の上より見たる人類觀たるに過ぎず、されど人は靈と肉とを有す。去て肉の上より見んか、人は如何にして生せし、人は如何なる形質を有する、之に答へて神之を造りたまへり、其像は神に似たりといへるは古代の妄想にして近世科學の斷じて許さゝる所、實驗と觀察とを基礎とせる近世

科學は抑も如何に人類を見んとする。

人類に對する古代の妄想を打破して其眞相を發揮し人とは何ぞやの疑問に最も明快の解答を與へたるものをダーウイン等によつて大成せられたる生物進化の理とす。生物進化の理發見せられて自然に於ける人類の地位、此に明かに、從來は揣摩憶斷を事としたる人類觀は其根底より顚覆せらるゝに至れり。暫く是等の學者が研究せる所によりて人類を觀察せんか、現今地球上に存在せる人類の概數は十四億七千七百萬にして人種を以て分てば、少きは二種とし多きは六七十種に區分し諸說紛々未だ一定せずといへども、最も普通に唱へられたるは

白色人種（歐羅巴人）　赤色人種（亞米利加人）
褐色人種（亞細亞人）　黑色人種（亞弗利加人）

の四分說並に

一、モンゴリヤ人種、　二、コーカサス人種
三、エチオピヤ人種、　四、マレー人種

五、アメリカ人種

の五分説にして人類學者は多くは人類より其系統を辿りて(一)亞細亞系統、(二)歐羅巴亞弗利加系統、(三)亞米利加系統、(四)南方亞弗利加系統、(五)海岸島嶼人民とし、さて是等の人類は同一種に屬すべきものか、又多種多樣のものなるかを攻究し、多源論者は今日人類分布の範圍の廣大にして其風俗習慣言語は本より容貌形質に至るまで到底一源に出でたりと思惟し得べからざるをいひ、一源論者は之れに對して土地の懸隔は久しき時代の間に浮浪漂泊に基因し其間の境遇事情によりて風俗習慣言語の相違を醸せるものにして其容貌形質は異なれりといへば異れりといへども、そは程度の差異にして根本の差異にあらず、坪井博士の「人類學講義」にいふ

斯くの如く生れつきの性質、先天的の性質に付て言つて見ると、世界中の人類に見る相違は極端の間には差があるが、悉く中間物を以て繋がるものであるといふことが分る、其他の人種的性質、言語で

あるとか風俗習慣であるとか云ふものは、段が付いて居つて中間物が無い（中略）人種的性質でも生れてから後、得る所のものは中間物は無く、離れ〳〵になつて居るけれども、先天的のものは繋かつて居る、言語或は風俗のみから判斷するならば、人は數種であると云つて差支ない、日本語と英吉利語は種を異にするものと云つて一向差支ない（中略）言語は數種であるとか風俗は數種であるとか云ふことは妨げないが、差し當りの問題は人其者の事である、持つて生れた先天的の性質から考へて見ると、確かに世界の人類は通じて仕舞つて一つの部類に屬すべきものである、一種であるべきものでありまず

と、人種の差は後天的のものにして先天的に於ては悉くこれ同一部類に屬すべきものたり、即ち同一根より出でゝ枝葉の分岐するが如く過去幾十萬年の間に分派して今日の狀態となれるに過ぎじ。然らば其原人の狀態は如何なるものなりしぞ、人類學者は最も古き人骨の化石等

より想像して、額は後退し、眼上の骨は突起し、顏の下半面は前出し、腮は後方に退りたるものなりしならむといふ、されば是等原人は偶然に湧き出でたるか、無窮の古より存在せしか、抑も亦神の創造に出るものなるか、學者は之らのすべてを否定して人猿同祖論を唱ふるに至れり。こは人猿相互の身體組織の相類似せるに基き、解剖學上確に証明せらるゝの主張にして、人猿は終に同一根幹より出でたる枝葉たるに過ぎざるに至れり、されど研究更に一歩を進めんには一切の動物も亦人類と其根幹を一にするを發見し、人獸の別は劃然之れを分ち難きに至るべし、殊に人身中に有する不用器官の存在は益〻其論を證明して力あり

一、體毛　今日にては人類には全く不用に屬すれども尙ほ全身に之れを有せるは人類の過去を語るものにあらずや、

二、盲腸　こは人類に於ては有害無益のものなるに今尙ほ存在するは曾て之れを必要としたる時代ありしにあらずや、カン

ガルー獸は、今も之れを以て消化を助け居るにあらずや、

三、尾骶骨　人類は尾を要せず、しかも尾骶の存するも亦過去の遺物と云ふべからざらんや

四、耳筋肉　牛馬の耳を動かすは耳筋肉の存するが故なり。人類の耳は動物の如くに動くものにあらず、されど今尙ほ此筋肉を存するは之れ動物當時の面影とや見るべき

予曾て人と動物との差異を說きて

人とは何であるか此問題は最も解し易いやうで、其實なか〳〵困難である。何故解し易いかといへば人とはどんなものであるといふことは誰れも知つて居るのでコンナものであるといへばそれで解るがコンナもの即ち是の如きのものをいふことは解つたやうで解らぬ。横目縱鼻は人のみに限らず、手で器具を持ち足で歩行するものも人のみではない。猿猴も矢張横目縱鼻で、手に物を持ち足で歩くことが出來る。殊に同じ猿猴類の中でも、猩々とかゴリラとかいふもの

になると人とあまり異らぬ。酒や烟草を呑むものもあるといふことだ。其身體組織も別段異つた所はなく、眼、耳、鼻、舌、等を備へ、其生活狀態も飢ゆれば食を求めて居るので、強て異る點を擧ぐれば顏の角度が歐羅巴人は顏から一直線を鼻の下に下し、鼻の下から耳に又一直線を描くと八十度の角を生するが犬や猫は三四十度しかなく猿は五六十度に過ぎないといふことである。これで見ると人間も猿とは顏の度の二三十度違ふ位であるかといふに。これは歐羅巴人（其他の文明國民）の顏と猿の顏とを比較したので、亞弗利加內地や南亞米利加の奧に居る野蠻人と比べると、これらの野蠻人の顏は矢張六十度內外であるといふことである、して見るとこれらの野蠻人は人間より猿の方へ近いといふてもよい程である、勿論これらの野蠻人は多く裸躰で家といふのも木の上や、穴の中であるから此點からいつても猿と異りはない。よし此點からは異りはないとするも、尙は人と獸類との異る主要の點がある。それは獸類（殊に猿の如き）

には全身に毛髮があるが人間にはない。これが人と猿との異る所であると主張する人もあるが、これもよく調べて見ると人にも毛がないのではない其毛は獸類に比しては薄いけれども全身にあるので、人類學者に毛人と名ける種族の如きは獸類と同じやうに全身に毛髮が密生して居るのであるからこれを以て人と獸類とを區別することは出來ない。されば言語の有無が人獸の區別で人類以外には言語を有して居るものはないと主張する人があるが、これも考へ物で、獸類に言語のないといふのが人間がそれを解することが出來ないからいふので、彼等といへども喜怒哀樂を其音聲によつて發表して居ることは事實で、悲しい折の聲と樂しい折の聲とは自ら別で、犬や猫の鳴聲でも大抵其の思ふ所が察せらるゝではないか、これら獸類には人間のやうな複雜な言語はなからうが、言語其者がないとはいふことが出來ない。是の如くに考へて見ると人と動物との區別は非常に曖昧なものになつて、人類の價値といふものは下落したといはねば

ならぬ。

こゝに更らに有力なる人獸區別の標準がある。それは人間と動物との異る所は精神のあるなしであるといふので、昔から人は萬物の靈長といふには此精神を主としたので、カントの如き大學者さへ精神は人類固有のものであるといふやうに說いたが、これまた一概に承知することの出來ない議論で、通常心の働きといふのはこれを智と情と意とに分けることが出來る。此中智の働きは犬や猿の持て居ることはこれに藝を敎ゆることの出來るのと其主人を能く記憶して居ることでも解るので、情の働きも親子の情、夫婦の情、それ〳〵に燒野雉子、夜の鶴、子を思はぬものはなく、番ひ離れぬ鴛鴦の如きも珍らしからぬのである。意の方も矢張備つて居るので馬や牛でも働くまいと思へば如何に鞭打つとも動かず、犬や猫でも爲さんと欲することは飽くまで爲すといふ性質がある、かく知情意の三ともに具はつて居るのであるから精神作用がないとはいへぬ。それはもと

より人間のやうに發達はして居らぬが、これらにも心はある。

さあかうなると人間と獸類との區別は、もと〳〵全く違ふものでなくして、人間の方が他の動物より一段と進步して居るといふに過ぎない。近世進化論の唱導は實にこのことを明にして、耶蘇敎がいふやうに人間は神が特別の恩寵を以て自分の姿に似せて作つて呉れたものので他の動物とは全く其趣を異にして居るなどゝいゝ說は半文の價値もなくなつたのである。進化論のいふ所によれば人も猿も其先祖は同じものであつて、人は其最も能く進化し發達したものであるとするのであるから矢張萬物の靈長には相違ないが、古の意味と趣を異にして居るのである。

ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲きけば
父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ

といふ古歌は進化論の上からいふても否定することの出來ないのである。

と云ひしことあり。

人獸の差は程度の差にて本質の差にあらず、人獸は終に共同の祖に達す然らば其先は如何、

「更らに更らに遡つて止まざれば幾億年の昔には、吾人人類はアミーバやモネラの如き一個の微粒に過ぎざりしを知るに至らむ、生物學者はかくの如く尋ねて其本を得たりこれを原形質といふ、原形質とは如何なるものぞ、こは鷄卵の蛋白の如きものにして、炭素、窒素、酸素及び水素を以て主要の成分とすと、これ實にハックスレー氏の呼んで以て生命の本源となすものなり、此原形質抑も如何の力を有せる、

一 收縮性　原形質は有性物質なるが故に自由に其形を變じて運動するの能あり

二 刺衝性　外界の刺戟に對して反動するの性あり

三 代謝機能　先にいふ如く原形質は運動を爲すによりて實質を撰取

して其缺乏を補ひ、かくして其體を構成せる物質を新陳代謝せしむるの機能あり、

四 成長機能　其攝取したる物質を同化作用によりて身體を構成せる物質と同一のものに變化せしめ且つ實質を增置せしむるの機能あり

五 生殖機能　一定の度にまで成大するときは、分體して其數を增殖するの機能あり

と、此原形質の微小なる塊を細胞といふ凡そ生物はアミーバの如き下等なるものより吾人々類の如き高等なるものに至るまで皆な此細胞より成らざるはなし、唯だ下等生物は其の體僅に一個の細胞より成るに過ぎざるも高等の生物は無數の細胞より集成せらるゝの差あるのみ、されば高等動物なる吾人々類も其本は單細胞の微粒に過ぎざりしものにして、其分殖作用により漸次進化發達して、今日の如くに至れるものに外ならざれば其間一脈の系統は永久に傳へらるゝ

なり、されば同一原形質より出でたる生物が如何にして今日の如く多種異樣に分たれしや、先きにも云ふ如く生物には生殖作用ありて、一個の單細胞は或る度まで成長すれば分れて二個となり、二個は四個となり、四個は八個となり、八個は十六個となり、其生殖速かなるが故に終に生活の困難を來して同類と競爭するに至り、最も其生活に利便あるものは其生存繁殖し、其境遇に適せざるものは亡ぶ、

これを適種生存の理といふ、菜の花に遊ぶ蝶の其色黃にして、松幹に棲む蟲の茶褐色なるも亦この理による、これのみならず、生物には身體を組織する物質を自然に變易するの能ありて、其四圍の境遇に應じて、身體の組織を變易するを以てかく多種異樣となりさらに、親の身體はこれを子に遺傳して子はこれを孫に遺傳して漸次單純より複雜に進化して止むなきを生物の理法とす（拙著死生觀）

生物は過去幾億萬年、遺傳の理法によりて繼承せられ淘汰の法則によつて支配せられつゝ終に高等なる人類を出すに至り、人類も亦幾十萬年

の進化と發達とによりて今日の文運に至る、而して今も尙ほ進歩の途上にあり、生物は進化し、人類も進化す、人類によりて組成せられたる社會も亦進化す、歩一歩、人は獸に遠ざかりつゝあり。人を目して萬物の靈といふ其義古今同じからずといへども、其靈たるに於ては終に否定すべからず、抑も人は如何にして其靈能を發揮すべき。請ふ先づ人格の何たるやを說て、進んで其養成法に入らしめよ。

中人格論

一　人格の意義

人とは何ぞやの疑問は略ぼ解答せられたり。されど、そは僅かに表面上の意義のみ、深く其内奥に入りて此疑問を攻究せんか、意義頗る多端にして容易に答解し得べからざるものあり。道徳家はいふ「人にして人にあらざるものあり」と、人にして人にあらざるものとは何ぞ、横目縦鼻、四肢五體を存す、形體の人にあらざるにあらず、其精神の人たる資格を缺如せるをいふなり、然らば彼の不倫不徳の徒は終に之れを人格視し能はざるか。法律家の見る所の人は全く之れに異り、苟くも人たるの形質を具へたるものは之れを人格視するに躊躇せず、道徳家之れを犯すも、不道徳家之れを犯すも、法律は毫も假借する所なく、同一律を以て之れを處罰す、法律家の眼中唯だ肉體をつて精神を問はざるか、否な、嚴峻なる法律といへども瘋癲白痴の行爲を以て之

れを人格視せず、目して不論罪と爲す、然らば瘋癲白痴は之れを殺すも罪なきか、否な、他に對しては依然として人格を有するものとす。

人格の意義こゝに於て明かならず、暫く心理學者の云ふ所によりて之れを示さんか。

人格とは自我の意識を中心核實として一切の思想、感情、慾望を統一する精神系統を有する個性を指す。

といふ。デカルトの所謂我思ふ故に我在り。我が思惟し行動する皆我を中心とせるものにして如何に思惟するとも、我が行動を以て他人の思想なり感情なり慾望なりとは考ふる能はず、此他人と區劃して自我といふものによりて一切の意識を統一し、曾て爲したりし事も、今爲しつゝあることも、之より爲さんとする事も皆自我を離れて存するものに非ずと意識する所、これ實に人格の根底たるなり、去て他の動物の行動を見んか、そは多く衝動的にてし餓ね來れば食ひ、渴し來れば飲み、怒れば狂ひ、恐るれば逃る、唯だ之れ外界の爲めに支配せられ

て自我なる意識によつて統一せらるゝことなし、自我なる意識によりて、統一せらる、之れ、人の行動に自ら責任ある所以にして、同じく人と、いふといへども、彼の唯だ衝動的に云爲して未だ明確なる自我の觀念なき小兒の如きは人格の萠芽は之れを有せりといひ得べきも、完全なる人格を以て目する能はざる所以なり。されば此自我なる意識とは如何なるものぞ。古に所謂靈魂なるもの之れにあらざるなからんや。何れの國の宗教といへども靈魂の存在を云はざるはなく、印度に於ても古く補特迦羅我（Pudgala）なるものありといひ、泰西に於ても亦ソール（Soul）の觀念ありて中世哲學者は肉身を以て惡魔とし、靈魂をして此魔界を脱せしめざるを以て宗教の能事の如くに思惟したるものあり、支那にも夙に魂魄の語ありて、抱朴子には

人に實恐なし、皆な己身魂魄ありと知る、魂魄半ば去れば則ち人病む、盡く去れば則ち人死す

といふ、されど近世の思索によれば靈魂なる一種有形的のものゝ存在

を許さず、意識を以て水の滾々たり燈の焰々たるが如く變化極りなく前滅後生前滅後生と繼續しゆく一の過程（Process）に過ぎずとし、昨の心は今の心にあらず、今の心亦明日の心にあらざれど、そは悉く自我なる意識に統一せられて、昨の我と今の我と、我に於て異るなきを自覺するこれ實に人格の一大要素となるものなり、たゞ遷流に任せし統一なく、雜念妄想夢の如くに過ぎ行きて之れを同一系統に纒むるものなくんば、其我たる所以、終に知るべからず、我たる所以を知らず、之れ豈に完全なる人格を以て目すべきものならんや。されば人格には此統一性なかるべからず、生理學者はいふ、吾人の身體は七年若くは八年毎に其形質を變化すと、形質に七年若くは八年を以て變化せらるゝとも其我たる所以は一なり。年々歲々花相似たり、歲々年々人相同じからずといふと雖も、其同じからずと見たるの人は又これ去年の人にあらずや。之れを心理學者に聽く、吾人の心内にも亦生存競爭、優勝劣敗の法行はれて、强き觀念は常に弱き觀念を壓伏し、終には之れ

を意識以外に放逐して全く忘却せしむるに至るの作用ありといへども、これとても實は意識以外に放たれたるに非ずして、暫く識閾以下に潜在して、其優勝者は明かに意識に上りて顯在的の勢力となれど、一旦意識の中に入りたるものゝ滅し去るべきにあらねば、或る機會に乘じては潜在したりし意識も亦顯在的となつて自我を組織するの一大勢力となることあれば、昨の心、今の心とさま〳〵に變轉するとも、其我れたるに於て毫も異ることなし、既に此の我たるに於て異ることなし、こゝに於て我が一切の行爲は我自ら其責任者となつて、自業自縛、免れんとするも免れ得べきにあらず、即ち我は我が主宰者たると共に、又其責任者たり、想ひ見よ。自己は自己の君主にして、自己は如何なることをも自由に思考し得べく、又如何なることをも試み得べきに非ずや。よし自然の法則は我を掣肘すといへども、我にして其責任を厭はずんば、一切の行動は我が自由に歸するにあらずや。これを人格構成の一要素たる主宰性といふ、我れに此の統一性あり、此の主宰性あり、

こゝに初めて人格なるものを生ず。

說て此に至れば勢ひ倫理學上の一大問題たる自由意志說に接觸せざるを得ず、自由意志の有無は直に人格成立の如何に關係す、倫理學の泰斗と云はるゝバウルゼン氏は如何か之れを見たる、

動物の活動は目前の衝動、感情及び感覺によりて規定せらる。一動物が獲物を見若くは獵師の行くを見るや其衝動、感情及び感覺によりて直に之を狩り若くは之を逃れ又思慮、疑惑、決意の暇なし。思慮、疑惑、決意は最發達せる動物即ち人間に至りて始めて之れあり。思慮、疑惑、決意は人間の特質なり。人間は決意によりて其行爲を規定す。決意は思慮結果なり。人の思慮するや多くの可能的行爲を自己の生活及び社會全體の生活の最終目的と見合せて其最適當なるものを選擇す。この故に人間は衝動感情によりて規定せられずして自ら目的思想により自己を規定す。人間は目的思想中に其全活動力、全生活を把住し、全部の觀念よりして殊特の實行を決定す。動物的

生活は數多に分裂せられて相互に關聯せる實行に分れ、人間的生活は一觀念の統一中に把住して後之を特殊の實行に及ぼす。實踐的自識の統一即ち良心は常に感情、努力、行爲、思想の內面的生活の特殊の發動を支配す。然るに其生活の觀念によりて特殊の生活活動を整理し規定する此能力は即ち吾人が所謂自由意志なり。是の故に自由に行動すとは目的及び理想により義務及び良心によりて其行爲を規定して刺戟及び目前の欲望によりて之を規定せざるをいふ。

是に於て吾人は尙一歩を進めて言はんとす、夫の人間の意志は自然律に支配せられずとの見解も或意義にては正しと、動物は自然的過程の經過點なり。動物其物は常に外部よりの刺戟によりて規定せらるゝ所の自然の一部分なり。人間は之に反して幾分か自然過程を逸出し、自然以上に位する自己たり。自然を規定し利用して之が爲めに規定せられず。換言すれば人間其地位を高めて人格となれるなり。

人間は其生活の各瞬間に其全自己を把住し得るは之が爲めなり。

是れ其行爲に對して責任のある所以なり。（倫理學大系に據る）

吾人は哲學上の論議を以て仔細に自由意志と必然の理法を說かんとするものにあらず。人格構成の上に於ては、少くとも或る程度まで人には自由の意志あつて、自己は自己の行動を自由に撰擇するの能力ありと信ぜずんば、日々の行動は唯だ他の爲めに動かさるゝ木偶の如くに爲りて自己の存在をも認むる能はざるに至るべし。況んや、多くの學者のいふ所によるも全然人に自由意志なしと斷ずる能はざるをや。曾て論じて曰く、

人は自然の兒なり、而も能く自然を動かすの力を有す、蒸汽の發明電力の應用は、此廣濶なる地球を縮少して千里の遠きも比隣の如く感せしめ、力山を拔くの氣慨は曾ては空論として一笑に附せられしも、今は事實に於て高山峻嶽をも人力の前には其高峻を誇る能はざるに至らしめしにあらずや、

まことにリース氏のいへる如く、人類は己れに反抗する諸勢を驅て

我が奴僕たらしめたり、人類の歴史は實に自然界克服の歴史にあらずや、誰れか人に自由意志なしといふものぞ、人に此意志あつて初めて社會の進運を計り得べきにあらずや、吾人は外界の勢力より全く分離したる人類を想像する能はざると共に、全く自由なき人類を想像する能はず、露國の文豪トルストイは、其關係を明にして曰く

凡て人間の行爲は皆な自由と必然との調和より成るものにして、如何なる行爲にても、一々にこれを吟味するときは、必らず自由の或る分量と必然の或る分量とを含めることを發見せざるを得ず、

而してまた自由の分量大なるに從て、必然の分量は漸く小となり、必然の分量大なるに從て、自由の分量漸く小となり來ることを發見するなり、自由と必然との比例は行爲を吟味する標準に從て增減すといへども、兩者は常に逆比例の關係を保つものなることを發見するなり

と人は必然の理法に支配せられざるべからず、然れども亦これを制

限するの自由意志あり、此二は相調和してこゝに一の行爲を作す、これ人類が道德上の責任を免るゝ能はざるの一大理由にして、亦實に萬物の靈長たる特徵なり

かくて人は自我を統一し主宰す、これ人の人たる所以にして人格の義亦之れに過ぎず。

二　人格の根底

自己は自己の君主なり。自ら自己の行動に關して責任を免れざる代りに、自己の行動に對して他より掣肘を受くるの義務あし。自己は自己に於て自由なり。されど其自由は絶對無限の自由に非ずして相對有限の自由なり。吾人も亦自然界の一員として自然の理法に支配せらるゝことを免かれず。自己が意識し行動するの範圍は自己に於て自由なるに似たりといへども。其自己をしてかく意識せしめ。かく行動せしむるもの多く自然の約束に存す。これ等しく人なりといへども、甲の思

念と乙の思念と其趣を異にし、丙の行動と丁の行動と其致を一にせざる所以なり。これを之れ個性（Individuality）といふ。個性とは個人の特性なり。此特性あつて人の面の異るが如く其心も異り、多種多様、こゝに複雜なる人生を形成す。先きにいふ所の人格なるものも實は自我なる意識を以て此個性を統一したるに過ぎざるあり。人格を究めむと欲す、先づ其根底たる個性の成立を問はざるを得ず。

個性の成立には二の要素あり、一を遺傳とし他を境遇とす。遺傳は先天的の要素にして未生以前より稟受し來れる性能なり。蓋し遺傳と淘汰とは生物進化の二大理法にして過去幾億年の昔より親は子に、子は孫に其體質を遺傳し來り、其間に淘汰の法行はれて適者は存し不適者は亡び、四圍の境遇に支配せられつゝ今日あるに至れるものなれば、吾人は其顏容に於て父祖の面影を存すると共に其性癖に於ても父祖の遺風を受けざるを得ず、ダーウインいふ、英國の小兒は佛人に就て佛字を學ぶも亦た英國的書風を脫する能はずと、爪の蔓には茄子を生せ

ず、鳶の子は依然として鳶なり。されば吾人も亦生來、誰れ敎へざるに自然に餓え來れば食を求め、渴し來れば飲を求むるの性能を有ち、之れを本能（Instinct）といふ、ハルトマンいふ、

本能とは目的の意識なしに目的に一致したる動作を爲すものなりと、本能は器械的無意識的に起す自發作用なり。されば其行動に對しては何等の思索を經ずして思索したるものゝ如くに作用するものにして全く衝動的なり、（心理學者は本能は主として情意の方面に用ひ、智的方面には直覺の語を以てす）シユナイデル氏は此衝動を分ちて感覺衝動、知覺衝動、觀念衝動の三種とし、動物の本能運動は此三種の衝動の錯綜して續々喚起せらるゝものとなしぬ。寒威に怖れて身體を屈むるは感覺衝動にして、他人の一方に走り行く時に吾人も亦其方に走るは知覺衝動なり、雨降り來らんとするを見るに雨具を準備するは觀念衝動なりとせり、されどこれら本能に就てはゼームス氏の

バークレーが言へりし通り、人間の本能的行動に付きて何故かを問

ふは之を問ふ丈それだけ心が學問によりて汚され不思議でもなき自然的作用が不思議に見ゆるに至りたるなり（心理學精義）

といひし如く全く自發的の作用にして、萬人必らずしも一ならず。例へば生殖本能の如きも適當なる時期に於て發作するものあり、或は一定の年齢に達しても發作せざるものあり、或は早くより病的に發作するものあり。防禦本能に於ても非常に鋭敏なるものあり。又癡鈍なるものあり、これら一に先天的遺傳に因す。本能の外に先天的要素となるものを稟性（Temperament）とす

古來人類の稟性を區別して四種と爲すの說あり、今尙ほ採用せらる。何をか四種といふ、曰く多血質（Sanguin）曰く神經質（Melancholich）曰く膽液質（Choleric）曰く粘液質（Phlegmatic）これなり、予曾て之れを說明していふ。

此四稟性に就て記述せる書頗る多しといへども、これを東西の人物に配當せるに於て最も興味あるを感ずるが故に、左に西村茂樹氏の

心學講義により其特質を明にせん、

多血質といふ、此體質の者は血液の補給迅速增進し神經の結構に至て堅强にして、能く此衝力に應答するに堪へたり、故に此體質を稟けたる人は峻疾なる感動を起し其體欲はこれを求むること甚だ急に、其情感は活潑なれども、甚だ移り易く、常に快活の狀態を保てども、事を爲すに過度に失し、又强き抵抗に逢ふ時は甚志氣を動かし、轉じて他方に向ふこと多し、又輕浮にして戲笑を好み深き悲痛を爲せども忽ちに忘失するの性あり、此體質は一個人の上に於て明かに徹見することを得べしと雖も時に依りて一國全體の體質に於てこれを見ることあり、即ち佛蘭西の民は此體質を具ふる者甚だ多くして、本邦の史によつて考ふる時は平淸盛、足利義政、支那にては漢武帝、唐玄宗、など此體質なるべし

此體質のものは思想變化し易く、外部の刺戟の爲めに心を動かし時に輕佻に流るゝの感なき能はず、政治家實業家に此種の人多し。其

二を鬱憂質又神經質といふ、此體質を稟けたる者は安靜にして寂然たる境界を好み、甚しき者は澁苦なる隱逸の所行を甘んずるに至る、若し程よく之れを管理するときは熟慮精密の習慣を成すことを得るなり、又此體質のものは既往の事を愛し、保守の念至て強く古代の聖賢の流風の湮滅を憂ひ、現今の人々の心思の缺廢するを傷みて自ら悲む、故に此質は常に憂愁鬱悶の意あることを免れず、又世界競爭のことに關せず、閑靜の事業を以て幸福として自ら之れを樂しむものなり、此體質は一國の全體よりは一個人の稟性に多しとす、西人の言に猶太のエレミヤ、希臘のホーマー、伊太利のダンテ、英吉利のクーパー、白耳曼のシルレル等を以て此體質の人とせり、支那にては此體質殊に多くして古來より有名の人に此體質を具へたるもの枚擧に遑あらず、屈原、陶淵明、杜子美の如きは其大なるものなり、本邦にては藤原藤房、鴨長明の如きは此體質の人なるべし

と、こは極端なる特性を觀察したるなるが、兎に角に神經過敏にして沈鬱に流るゝ人々は此體質なるべく、文學者、美術家、宗教家、哲學者に多くはこれに屬するが如く、俗にいふ苦勞性なるものも亦此質なり、

膽液質の者は筋力强健にして血液の運行も又盛んなり、其人の性たる志謀膽氣大にして、之を强行するに忍耐の力あり、又抵抗に遇ふ毎に勇氣を以て之に打ち勝たんとするの氣力あり、此質は多血質と相似て異なる所あり、其の事を爲すに衝動力の强きと熱情の盛なるは多血質に同じと雖も、其思慮の熟せると決斷の堅固なるとは多血質に勝れり、善人に於ては仁惠と爲り、惡人に於ては暴虐となり殘酷となり剛猛となる、而して其善惡兩樣共に決斷と自信とを有するものなり、西國にては古代のスパルタの勇士、羅馬の大將兵士の如き、此體質の者多し、シーザーとプルタスとは敵讐なれども、共に膽液質の人なり、其他ボナパート、ホウード、

ハンプテン、ラウト、ヘロデ、ポーロの如きも亦此體質の者なり、支那にて魏曹操、唐太宗、本邦にては武田信玄、上杉景勝など之れに當るべき者にして、豊臣秀吉の如きは此體質と多血質とを兼ねたるものなり、

ロッチエ氏は此質のものを説て「著しく一方に偏し、勢力一方面に盛なり、興奮の感性少しと雖、感應一たび高まれば其反應力大にして、忍耐力も亦大なり、性質の強固なるは其長所にして理に合はざることをも、一旦思ひ立ちたる以上は強てこれ行はんとするは其短所なり」と云へり、強情にして人の言を容れず、自ら信ずる所を行ふ英雄の資性なり、軍人に此性の多きを見る

粘液質の者は筋の構造、情意の奮勵共に前の者に及ばず、血管の運行は平靜にして安隱なり、此質の者若し其粘液の性甚だ強きときは其精神は重鬱にして遲鈍となり、又懶惰にして愚昧に近きものあり、然れども、若し其質適當なるときは、其方向善良にして

其生命を保持するにも順序あり、(中畧) 又其思慮堅定して、久しく之れを動かさゞるの性あり、故に能く忍耐の力に富み、其所行常に平靜にして、變動することなく、善く卓越せる事業を爲すを得べきものなり、和蘭陀人には粘液の者多し、日耳曼の理學者は此質と鬱憂質とを兼ね、英吉利の事業を爲す人は此質に膽液質を兼ねたるものあり、適度の粘液質は體質中の最貴と稱すべし、西國にては師父ヨセフ、ニユートン、米のワシントンの如きは皆な適度の粘液質の人、支那にては諸葛孔明、朱子、我邦にては北條泰時、德川家康の如き此質なるべし、

適度の粘液質は平凡の偉人を出すといへども、此質の甚しきものは變化少く感覺遲鈍にして愚昧なるもの亦少なからず、下女下男に此質のもの多しといふ、四禀性は一人にて單純に一質を得るもの少なく、多くは二質三質を兼ぬるが故に強てこの四禀性に配當して一概に斷定せんとするは誤謬たるを免れずといへども、其の極端なる性

情を看取してこれを大別するときは大約此の四稟性に過ぎざるものゝ如し（拙著運命觀）

人は人として悉く同一の體性を遺傳し來る（普遍遺傳）と共に又個人として各異れるの性を遺傳し來り（特殊遺傳）先天的に其性情を異にす。右に述べたる四稟性の如きは其主要なる傾向に過ぎず、さて此くの如き區分を生ずる原因の最も明かなるものを直接遺傳とす。こは父母の性質を子に遺傳するものにして、子の父若くは母に酷似せるは何人も知悉する所にして、其性情に於ても亦頗る相類せる所あるは吾人の日常經驗する所なり、ジョンスチュアード、ミルの父はゼームス、ミルにして父子共に學者を以て聞え、進化論の唱首チャーレス、ダーウイン。祖父はエラスマス、ダーウインとて有名なる博物學者、父は亦醫師として其名高かりしといひ、チャーレス、ダーウインの子はジョージダーウインとて天文學者たり、賴杏坪、賴山陽、賴三樹共に文學を以て名あるの類枚擧に遑あらず。こは父系に於てのみいへるものな

れど母系に於ても亦此理法に乖かず、アレキサンダー大王は或る關係に於ては其父フィリップに似、他の關係に於ては其母オリムピアに似たるが如く、父母の性情を錯綜して遺傳するものなれど、多くは父母いづれかの性情に偏重するものなりとす、此直接遺傳の外に隔世遺傳なるものあり、祖先の心身諸性質が直に其子孫に再生さるゝものにて近くは祖父と孫祖母と孫女との間に起り、遠くは幾世代を經て遺傳せらるゝことあり。側系遺傳なるものあり、間接の血統によりて各個人と其先代の支親との間にも遺傳の行はれて伯叔父と甥、伯叔母と姪との間に性情の酷似を見ることあり。かくの如き諸種の遺傳によりて吾人の個性の大半は組成せらるゝを免れず。されど吾人の個性は此くの如き先天的要素のみにあらず、外に必須なる後天的要素あり。

後天的要素は周圍の境遇によりて意識的若くは無意識的に自己の性格に影響し、其個性を成立するものにて其主要なるもの三あり、曰く自然、曰く社會、曰く家庭。

吉田松陰いふ「地を離れて人なし、人を離れて事なし」と、人は終に地を離るゝ能はず、されば周圍の地理的現象が其人の個性に影響することの大なるを看取するに難からず。偉人、山水に生れ、山水、偉人を生むか、人は畢竟自然の兒なり。ヒマラヤの山高くガンヂスの流清き所に思想高遠、性行皎潔なる釋迦を産みアラビヤ平原熱砂千里、而して峻烈なるマホメットを生じ。コルシカの一島森茫たる海に臨む所に氣宇廣濶なるナポレオンあり、山遠く地廣き尾三の平原に織田出で豊臣出で徳川出づ、これ豈に偶然ならんや。山國の人は自由の精神に富み獨立の氣象を有するも、偏狹に失し頑固に流るゝを免れず、アルプス山系、峯巒の中にある瑞西、ヒマラヤ山脈中に獨立を保てるネーポル、ブータンの二國ある如き其例證にして人國記の著者が（北條時賴と傳ふ）山國たる甲斐を以て人の氣鋭く傍若無人の事多しといへども強勇にして能く事に耐ゆと見、飛彈の國を評して健直にして恐なり、日本は廣しといへども、我國に如くことなしと

思ひ、他國の望もなし、井の中の蛙、大海を知らざる如しといひ、美作を目して「片意地にして人の教訓を聞入れず」といへるは其短所を認めて長所を逸したるの嫌なきにあらざれども、全くさることなしとも云ふべからず。山國は沈思冥想には適すべけれど、實地應用には適せず、山國は修養の地にして活動の地にあらず。平原國は人文發展の地なり。されば此國の人は卑屈に流れ服從に失し、彼の山國の如き獨立自尊の心に乏しく輕佻浮薄に陷るの患なきにあらざれど寛裕にして快活なる長所を有す、所謂大陸的氣風なるものは此地方に於て初めて認め得べきなり、黄河楊子江の流域たる支那平原若くはウオルガ、ドニープ沿岸なる露西亞民族に於て其長所をも短所をも認め得べきにあらずや。之れを我が國の例に見るに人國記の著者は淀河平原たる攝河泉の人情を叙して、攝津は「武士にても町人百姓のなす如く」といひ、和泉は「譬へばはがねなき剃刀の如く」と爲し、河内を以て「雪のあしたの庭面の柳、たゆひといへども、終に折るゝことな

し」とし、尾張の平原を評して「國民巧才なる所あり」といへるも亦以て其一斑を察し得べきにあらずや。支那に於て江南江北其趣を異にし、我が國に於て關東關西其風を同うせざる、更らに雪多き國民の貯蓄に富み、地震多き國民の未來の觀念乏しき、都會の人の智鋭なれども浮誇を事とし、地方の人の智鈍なれども質實を旨とする等、自然が個性に影響する所、實に尠少にあらず。

然れども之れ啻に自然の形勢のみならず、其個人を圍繞せる社會狀態の感化も亦偉大なるものにして、佛國の社會學者チュルケーンは社會組織の要素を以て一種の壓迫なりとし、多數の思想、多數の感情、多數の習慣は積集して偉大なる勢力となりて個人の精神を壓迫し來る、個人が之れに服從する所に社會組織の根本要素存すとし、タールドは社會組織の根底なる人と人との關係は一人が他人を模倣するにありとし、多くの社會學者もこゝに一面の眞理あるを認めたるに徵するも、社會狀態が個性を動すの勢力たることは疑ふべからず、時代には時代の

精神あり、社會には社會精神ありて、太平無事の時には文弱の弊起り、干戈倥偬の時には殺伐の氣風を生ずる如き過去の歷史之れを証明して餘りあり、米のラッドが佛蘭西人は多血質、英吉利人は神經質、西班牙、伊太利の人は膽液質にして獨逸は粘液質なる多しといひしも、自然の影響のみならず、此社會狀態が斯くならしめしもの與つて力あるを忘るべからず。尙ほ之れらの影響よりも其範圍小にして感化大なるものを家庭とす。人は其幼時に於ては家庭の中に養はるゝものなるが故に家庭の善惡は直に其個性を左右し、終に一生の運命をも支配するに至ること少からず、俗に所謂「氏より育ち」にて高尙なる家庭に人となりしものは自から品格具はり、卑野なる家庭に成長せるものは、何となく下品なり、慈悲なる母に養はれたる子は柔順に、繼母の手に哺まれたる子は長く繼子根性を失はざる如き、習なる之れ家庭の影響にして英の大宗敎家ジョン、ウエスレーは自ら「予が今日あるは母が幼時の敎育にあり」とし、ヴイクトル、ユーゴーをして文名嘖々たるを得せ

◉人格の根底

しめたるも亦母の力に外ならずといふ、彼の楠正行の母が其子に及ぼせる感化は或る人が

よしの山若木の花をおほひつゝ
はゝそのかげの高くもあるかな

と詠せしにても知り得べきにあらずや。

人の稟性は遺傳によりて先天的に稟け得たりといへども、四圍の境遇によりて諸種の變化を呈し以て其個性を形成す、この個性は實に人格の根底を成すものたり。即ち個性は

- 個性
  - 先天的要素
    - 稟性
      - 本能
      - 遺傳
  - 後天的要素
    - 自然
    - 社會
    - 家庭
    - 境遇

と爲すことを得べし。

三　自我の觀念

人格の根底は遺傳と境遇とによりて左右せらるゝこと前述の如しとせば、其根底の上に築かれたる自我の觀念も、其實自我にあらずして遺傳と境遇との上に構成せられたる假合物にして、佛家の所謂過去業因の積集によりて稟け得たる五蘊の假和合に過ぎざるべし。

佛家此我を以て肉體と精神の混和とし、肉體を名けて色蘊といふ、（蘊は積集の義なり）之に眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根の六あり、此六根の對境となるべきもの色境、聲境、香境、味境、觸境、法境あり、之を受納する感覺作用を受蘊といふ、此受けたるを思想するもの想蘊、それに就て決意し行動する、之れ行蘊、之れらを意識するものを識蘊といふ、識とは了別の義、眼耳鼻舌身意の受納の思想し行動するを了別するものにして眼識乃至意識の六あり、其中意識を以て主要なるものとす、かく六根六境六識の假和合にして此外に我あるものなしとして諸法無我の說を立つ、

◉自我の觀念

更らに其意識に就て見るも、意識の流れは變化甚しく一瞬間といへども止ることなし、毘婆婆論のいふ所によりて推算せば一念の中に九十の刹那あり、一刹那の中に九百の生滅あり、とすれば一念少しく動くの時、既に八万一千の生滅あるなり、かくて一時間の中には二億六千六百六十七万八百三十二餘の刹那ありて、一晝夜には六十四億九万九千九百八十の刹那ありといふ。何れをか我が思想とすべき念と遷流して暫くも住らず。朝に思ふ所は暮に想ふ所に異り、午前に思想する所、午後に考慮する所と同じからず、かく變化極りなしといへども、こは常に統一せられて變化定りなき中にも、一定不易の自我なるものゝ存するを認む、自我は實に我が智性を統一し感性を統一し、一切の意識を統一して、よし時々刻々に矛盾し衝突するとあるとも我が思ふ所を以て他人の思ふ所のものとは認むる能はざらしむ、吾人の意識は常に自我なるものによつて統一せられつゝあるなり。これをこれ人格的意識といふゼームス氏の心理學には意識の過程に四性質を有することを

說きて、

一　心意の狀態は人格的意識の一部となるべき傾向を有する事

二　人格的意識の諸狀態は絕えず變化しつゝある事

三　人格的意識は連綿として相繼續する事

四　人格的意識は常に其對象中の或る者を歡迎し或る者を拒斥しつゝある事と、

こは心理學上至難の問題なるべしと雖も吾人は敢て深奥なる學理的說明を待たずとも、自ら內省し日常の經驗によりて直に知るを得べき事實に外ならず。吾人が意識には統一あり變化あり、而して其變化は不斷に繼續して以て自我の歡念を成し、時に此自我の欲する所を求め、自我の欲せざる所を拒む。これ眞の自我なるべきか。賢首大師の華嚴探玄記には、我を分ちて四種とす、一に曰く眞我、二に曰く自在我、三に曰く假我、四に曰く執我、執我とは變轉定りなき自我を常住不變の實在なりと執着するをいひ、唯だ之れ變化不定の上に因果の連續に

よりて一物の存する如くに思惟せらるゝに過ぎずと認むるは仮我なり、自在我とは我れに自在の智力を存するをいひ、眞我とは直にこれ宇宙精神と脉各貫通するものありとするにて、涅槃經に、

我は即ち是れ如來藏の義、一切衆生悉く佛性あり、即ち是れ我の義

といふものこれなり。されば こゝに所謂眞我なるものは神性なり、佛性なり、宇宙精神なり、相對差別の我にあらずして絶對平等の大我なり、トリユー、セルフ (True-self) なり、マッケンジーは眞我(トリユーセルフ)を解して曰く

眞我とは合理的自我といふべき語を以て言ひ現はすを以て適當なりとす、これ吾人が最深の智慧、最深の知見の時に占めたる所の宇宙なり

と、これ實に吾人が心裏の奥底に潜める自我なり、暫く自といふといへども他を擇ぶ所なき共通の大我なり、此大我によりて人は神に通ずべし、されど、此眞我一たび動きて假我に傾くの時、こゝに主我客我

の分立を見る、馬鳴菩薩の說に從へば眞如、平等の水、生滅の波を起すの端的を阿黎耶識といふ、此識に二義あり、一は覺として眞我に屬し、他は不覺として假我に跨る、此阿黎耶識の動くの時、直に業相轉相現相の三相を生ず、業相とは詳しくは不思議業相と名く、湛々池水の如き心の少しく動きかけたるの刹那なり、此刹那に轉相(又は能見相)とて主我を生じ、現相(又境界相)とて客我を生ず、我思ふ故に我ありといふ、我は主我にして其の思ふ所のものは客我なり、此客我によりて迷執ますます加はり終に我執を生ずるに至るといふ、其我執とは如何なるものぞ。

固く自我なるものを他と峻別して自に屬するものを愛好し、自に屬せざるものを憎惡するの念なり、人は他の身体よりも自の身体を愛し、他の衣服財産よりも自の衣服財産に執着す、此に於て若しまた自に屬せざるものにして自の愛好するものあれば強て之れを自に從屬せしめんとし、自の憎惡するものゝ來て自に近かんとすれば之れを拒否せん

とす、慳貪の念此に萠し。瞋恚の心此に起り、一切の罪惡皆な此に源を發す、之れを個人的自我と名く。

されど人は此個人的自我のみを以て滿足し得べきにあらず其生活當然の狀態として人は社交的動物なれば、互に相依り相助けて以て其生活を圓滿にす、小は家族より大は國家、社會に至るまで皆な一致共同に基く、されば其共同生活の一員としては自己の欲望を犧牲に供しても却て自ら滿足するとあり、是を社會的自我といふ、同情の念内に動きて禁ずる能はず、終に個人的自我を沒し、自を見る如くに自の家族を見、自の家族を見るが如くに自の國家を見、更らに世界人類を見るに至る、人の品位は其同情の廣狹によりて高下し得べきにあらずや、かくて其範圍益擴張して終に宇宙と其大を等うする所に至りて宇宙的自我となりて眞我の光こゝに輝き宇宙即ち我が心、我が心即ち宇宙たるを得べし、グリーン説をなして曰く

此宇宙の本體は一大意識にして萬象は其表現なり、故に全宇宙は精

神的にして且つ合理的なり、されど物質界には此自識なく、獨り人類に於てのみ此宇宙を自識さる、これ實に人類の特色にして、人は他の動物の如く體慾及び感覺を有すれども、其體慾は目的の意識により、伴はるゝが故に動物の體慾と異りて其體慾は即ち欲望なり、其感覺も亦智識の分子含まるゝが故に動物と異りて知覺なり、人の欲望、人の意志、人の知覺は其實一物の異相にして智識と離れたる欲望、意志なく、欲望と離れたる智識意志なく、意志を離れたる智識欲望なし、人の善とは欲望の對象をいふ、即ち之れによりて自己を滿足するを得るが故なり、道德的善とは人の道德的資格を滿足するものをいふ、道德的資格とは自己實現の資格をいふなり、人に理性あるが故に一層高尚なる眞の自己を理解し、意志あるが故に此理解力に一致せんことを努力するの資格あるなり

と、かくて近世倫理のオーソリティたる自己實現説は主張せられぬ、自我の實現とはマッケンジーの所謂「眞正に我自ら我たらざるべからず」

と努力するに外ならじ。想ふに自我を以て統一せられたる意識中には理智あり、感情あり、單に感情の滿足のみを計れば徒に快樂に耽りて理性の不滿を免れず、理性を滿足せしめんと欲せば制慾の手段に出で感情に滿足を與ふる能はず、理智と感情とを統一して何の不滿なきに至らしむるは自己實現の本旨にして、妄に瞬間の自我を喜ばすことを知て、長く悔改の念禁ずる能はざらしむるものは眞の自己實現にあらじ、

自己實現は眞我の探求なり、理想の自我を發現せんとして努力し奮進するにあり、かくて性格は發展し、品位は向上すべし、人格養成の要、他なし、小なる我を離れて大なる我に合致し仮我執我を棄てゝ眞我を發揮するにあり。

四　性格の變換

宇宙の本体は平等一如なりといへども、現象は千狀万態なり、人心の祕奥に横はる眞我の光は平等一如なるべしといへども、其現れたる人

格は亦千狀万態なるを免れず、或は卑陋にして唯だ個人的自我を執して其他を顧みざるあり、或は高尚にして他の爲めには自を思はざるあり、これ皆な遺傳と境遇とが其個性を左右して終に此くの如く成らしめたるに過ぎず、此遺傳と境遇とによりて形成せられたる個性は終に改むべからざるか、曰く否、其先天的要素たる遺傳に於ては之を改むること難しといへども、其後天的要素たる境遇の如きは又其の變遷によりて之れを變改せしむること難きにあらず、田舍に於て質朴なりし人をも都會に出だして輕佻の徒たらしめ甲の家庭にありて幽欝なりし人も乙の家庭に入りて快活ならしめしの例少からず、況んや教養其宜しきを得、訓練其當を得たらんには改め難き先天の稟性をも幾分改善することの難きに非ざるをや、こは專ら外部の影響に就て立言したるものなれども、若し夫れ自ら怠らず不斷に眞我の發揮を計り、歩々宇宙的自我に近づかんことを望まんか、吾人の性格(Character)は漸次改善して其品位(Dignity)は次第に向上するを得む、蓋し性格は其人の特性

にして品位は其人の價値なり人格其者は變換して自を以て他と爲す能はざれど性格は變換して向上せしむべく又墮落せしむべし、其向上と墮落によりて直に其人の價値たる品位を定むべし。

(註)性格の變換は人格の變換には非ず、人格は人自身なり、其變換とは即ち人の變換にして之に二あり、一を自然的變換といひ、他を人爲的變換といふ、自然的變換とは又偶發的變換ともいふべきものにて通常病者によりて見らるゝものにして主としてヒステリー患者に多し、突然或る事情に(多くは睡眠)によりて全く往時の記憶を失却して別人の如くになり、又突然の事情によりて舊に復するの類にして沈鬱の人が快活となり、快活の人が沈鬱となり全く現時の境遇を忘るゝに至るものにて、人爲的變換といふは又誘發的變換ともいふ、催眠術施術の際に起る現象にして、催眠狀態にあるものは全く平生の記憶を止めず、施術者の暗示によりて行動し全く平生の我とは別人の如くなるなり、此他自ら他人と成り了れりと思惟し、同一人が二重

の人格となり、三重の人格となることあり、されどこれらは心理學上の問題にして本書の云ふべき範圍にあらざれば、こゝには略す、人格の變換は以上の如き意味にして今いふ性格の變換は自我を變換し分裂するにあらずして之れを向上し若くば墮落するをいふに過ぎず

人格の變換は人の變換なり彼の狐憑の如き病的狀態か若くは催眠術に於ける變換に非ずんばもとより期すべからざれど其主要分たる性格の變換は得て之れを企つべし、謂ふ所の人格の養成とは此性格の改善なり、此改善に漸修的なるあり、頓入的なるあり、其漸修的なるものは、習慣性を作りて漸次に眞我の發揮に進むものにして性格改善に於て最も健全なる方法なり、まことやウエリントン侯の云へる如く、「習慣は第二の天性にして其力は天性に十倍す」るものなれば、善の習慣を積めば性格を向上せしむべく、惡の習慣を積めば品位を墮落せしむべし、ペイン曾て習慣養成の法を說ていふ、

一　新らしき習慣を作り若くは舊き習慣を破らんとせば、吾人は鞏固なる意志を以て其事に從はざるべからず、

二　習慣が汝の生活法に固着するまでは之れに反對なる事情を生せしめざることに注意せざるべからず、

即ち舊習慣を打破して新習慣を作るの當初に於ては萬難を排し奮鬪的態度を以て之れを行はんか、既に行ひたることは次ぎに行ふべきことの助けとなりて、第一回より第二回は易く、第三回は第二回よりも便に、かくして數十回を重ねて怠ることなくんば終に全く其舊習慣を打破するに至るべし。彼の飲酒に耽るものゝ之れを禁せんとする當初に於ては、非常の決心と努力とを要するも、一日は一日より易く、一月二月を經過する中には終に酒を欲せざるに至る如き即ちこれなり。されど若し一たび當初の決意を翻さんか、猶ほ糸を以て球を卷くものゝ、球一たび手を逸せば、之れを恢復するに數十回を要するが如きものなれば、斷じて反對の事情を生せしめざることに注意せざるべからず、

こは修養の上に就ていひたるなれど、墮落に於ても亦此くの如く初めて罪を犯すの時に當ては苦慮懊惱、幾度か躊躇するものなれど、一たび之れを犯さんか其良心は漸次摩靡して「毒食はゞ終に皿まで」に至るを免れず、これ實に習慣の性格變換に力ある所以なり、

是等の漸次的なるに對して激變的なるものあり、之れを宗教上の懺悔とす、懺悔は實に性格一變の力あるものなり、僅かに悔恨の心動きても罪惡を二びせじとの心を起し、此心を以て其行爲を決す、此決心は直に性格となり、其性格は第二の行爲を導き、導き導きて終に其性格を向上するに至るべし、懺悔は自ら救ふの力なり、殊に宗教上の意義に於て至心に懺悔する如きは其性格を激變せしむるの力あるものなり、曾て懺悔を論じて其眞價を示したることあり、

一體懺悔といふ語は印度の懺摩といふので、支那に譯して悔過といふ義であるのを梵漢兼擧して懺の字と悔の字とを合せてかくいふので、至心に罪過を悔ひて之れ二び犯さじと誓ふの意であるといふこ

とで、必らずしも、人に向て告白するを要せないやうであるが、梵網經の初めに「罪あれば懺悔せよ罪なければ默念せよ」とあるのを見れば告白といふことが此字に伴ふことは疑ふを要せぬ。英語のコンフエッションといふのも亦此告白の義があるのであるから唯獨り罪過を默念しただけでは懺悔の眞義でない。即ち人又は人以上のものに對して自己の罪過を告白して、我が心の垢を除く所に懺悔の意味は存するのであらう。「祓ひたまへ清めたまへ」といふ神道には大祓なる の儀式があつて罪垢洗除のことがあり、其他の宗教いづれにもこの懺悔といふことを云はぬことはない。併し外の宗教のことは私は詳しく存じませぬから略するとして、佛教のいふ所の懺悔を立脚地として予の聽ける懺悔を評せむとするのである。

懺悔といふのは今いふ如くに罪過を悔ひ改めるといふことがなければならぬのであるから、懺悔の前程には罪惡の自覺を要するので、罪惡の自覺がなかつたならば如何に罪惡の事實を告白しても未だ以

て懺悔とすることは出來ない、彼の南龍公の言行錄に現はれて居る紀州熊野の奥に自ら其親を殺して罪なることを知らず、奉行所で調べられても、私は親を殺しました、私の親は酒を呑んで他人に迷惑をかけますから手に掛けたに相違はございませぬ。これが何んで惡いのでございます。自分の親を自分が殺すのは自分の品物を自分が壞すやうなもので何にもお奉行樣の世話になるには及ばぬといふたものゝ如きは罪惡の事實を告白して居るのであるが、其事實の罪惡たることを知らぬのでありますから自白には相違ないが懺悔ではありませぬ。私の聽きました懺悔にコンナのはありませぬが、紳士と云はるゝ人々に時々得意然として罪惡を告白せらるゝのを聽いたことがあります。例へば花柳界に沈淪したとか。賭博で勝利を得たとか、人を欺いて金を儲けたといふやうなことです。これも其罪惡たることを知り悔ひ改むる心があつて告白すれば懺悔ですが、彼等の良心は麻痺して其罪惡たることを知りませぬ。其罪惡たることを知

らぬのでありますから懺悔ではない。よし又其罪惡たるを自覺しても、至心に悔ひ改める心がなければ矢張懺悔とはいへぬ。少しにても自ら辯護して他の同情を得やうとする傾向があれば、これ眞に至心に切實に悔ひ改めたものとはいへぬ。若し夫れ至心に切實に自己の罪惡を悔ひたならば、自ら辯護する心の起るべきものでもなければ、他の同情を求むる心の起るものでもない。予の聽ける多くの懺悔には不幸にして此傾向がある、皆な多少の修飾がある、掩ひ隱す所がある。これは決して眞の懺悔ではないのである。併し何の修飾もなく何の掩ひ隱すこともなく、脫白に自己の罪惡を告白するといふことは、よし至心に悔ひ改めたからとて出來ることでせうか、私はそれは實際に於ては出來ないことではないかと思ふのです。何せかといふに若し自己の罪惡を少しも隱さず、心に思ひしことを其儘に出したならば、人は其罪を許してくれませうか。心に妍きを思ふはこれ姦淫せるなり。心にほしいと思へばこれ盜めるなりといふ

やうな道德上の高い意味からいふまでもなく、われわれの日常やつて居ること心に思ひしことを其儘に社會に告白したならば、社會はこれを許しませうか。實にこれ自己の生活の全破壞で、狹量なる社會は其人を許さぬのみならず。其人の地位をも奪はずんば止まないのであります。かゝる社會に於て脫白に告白するといふことは自ら死するのであり、社會から葬らるゝものであります、

社會から葬らるゝ何の恐るゝ所かあらんと、脫白に露現して自ら潔うするといたしました所が、それが社會に如何なる暗示を與へるでありませう。その爲めに人に懺悔の念を起さすことが出來るかといふに決してさうではなく却てその人の瑕疵を見て、彼の人にして尙ほ此くの如きことあり、われらが之れを爲すは當然のみと自ら許す心を起さしむるに至るもので、盜賊の懺悔話によつて盜賊の秘訣を知り、紳士の懺悔話によつて自己の放蕩を辯護する材料とするやうな風は、これ免れ難き傾向であるから、私は人の前に懺悔すること

は其人自身にとつても、社會にとつても害あつても功なきことゝ思ふのであります、されば懺悔といふことは出來ないことであるか。否な然らず。これは人前懺悔に就て云ふたので、眞の懺悔は人以上のもの即ち神なり佛なりの前で告白することにあるので、これを人前懺悔に區別して佛前懺悔といふ。佛前懺悔は發露白佛といふて至心に罪過を悔ひて二び犯さじと佛に誓ふのであります。此佛前懺悔は我が國には古くより行はれてこれが國家の事業ととなつたことがあるといふのは面白いことではないかと思ふ、それは佛名會のことで、光仁天皇の寶龜五年十二月に宮中に於て初めて行はれ、仁明天皇の承和五年十二月に二日三夜清涼殿に於て行はれ、次で淸和天皇の貞觀十八年十二月に佛名懺悔を行ふべきことを日本全國に布達せられて十五日より三日間(後に十九日より三日に改めらる)六十餘州全く懺悔道場となり、殺生は禁斷せられ、諸方に於て懺悔の儀式が行はれたので、菅原道眞公に懺悔頌なる七言長篇の詩がある。其詩の

初めに「一切衆生煩惱身、求哀懺悔仰能仁」、承和聖主刺初下、貞觀明壬格永陳、內自九重外諸國、起於萬衆及黎民年終三日凝心馬天下一時轉法輪」云々といふてある。この儀式は建武の頃まで行はれたと見ゑて、建武年中行事には「御佛名十九日より三日なれども今は大やう一夜あり、御帳の中に本尊かけと南の壁の間に又二幅かけたり、廂に地獄變相の屏風を立つ、今の世は大宋の屏風なり云々」とある、其後も御懺法講として行はれて居つたといふことです。これらは形式的のもので、佛前懺悔とはいひながら私の今いふ眞の懺悔ではありませぬ。

懺悔に二つの法がある。一を事の懺悔といふ、他を理の懺悔といふ、事の懺悔といふのは前に述べた佛前懺悔の如く形式的に行ふので、或る程度まで此形式といふものも必要であらうが、曾て我が國に行はれた御懺法講の如く單に形式にのみ拘泥して居つてば到底眞の懺悔といふことは出來ない。理の懺悔といふのは、『四教儀』に「理は

即ち理性、過現所作の一切の罪業皆な心より起る、若し自心の本性空寂を了れば則ち一切の罪相も亦た皆な空寂なり」とあるので、心の本源から至心に罪業を洗滌するので必らずしも佛前に於て形式を具へて行ふを要せない。これが即ち眞の懺悔といふものであらう。

眞の懺悔は自己自ら罪惡を悔ひ改むるので、その事が至心でさへあれば敢て人前佛前に於て告白するには及ばぬのではなからうか、涅槃經の中に「先に罪を作すといへども、後、能く發露し悔ひ、已に慚愧し、更らに敢て作さざるは猶ほ濁水に明珠を置けば、珠の威力を以て水即ち清きが如く、陰雲除けば月則ち清明なるが如し、惡を作して能く悔ゆ、亦復た是の如し、懺悔して慚愧を想ふものは罰則ち除滅して清淨なること本の如し」といひ、又「水の滴り微なりといへども、漸く大器に盈つ、善心亦爾り、二の善心能く大惡を破る、若し罪を覆ふものは罪則ち增長す、發露慚愧すれば、罪則ち消滅す」とある上から見ると、懺悔の要件は至心に慚愧するにある。心に慚

愧の念を生ずるはこれ則ち懺悔の第一歩で、或る書に──確か飜譯名義集であつたと思ふが──「懺は慚に名く、悔は愧に名く、慚は即ち天に慚ぢ、悔は即ち人に愧づ」とあるのを見ても慚愧といふことが眞の懺悔の必要條件なることが解るこれ即ち私が懺悔の前程には罪惡の自覺がなければならぬといふた所以で、單に罪惡の結果を免れんが爲め、更らに宗教的にいへば未來の報ひを恐るゝが爲めにする懺悔は眞の懺悔とは認めないので、私のいふ懺悔は罪惡其者を憎みて慚愧の念、禁ずる能はざるものを指すので、罪惡其者を憎むの念薄く、唯だ己れより來る果報を免れんが爲にする懺悔は自利的であつて且つ不健全である。如何に懺悔したからとて既に犯した罪惡の報を全滅してしまうことは出來るものではない、既に犯したる罪惡の報は甘んじて受けよ。而して其罪惡を憎みて二び犯さざる所に懺悔の價値はある。昔、僧璨といふ人が、慧可に對して、弟子身、風恙に纏はる、請ふ和尚我が爲めに罪を懺したまへといふと、慧可は

罪を將ち來れ汝が爲めに懺せんとやつた、僧璨は暫く考へて居つたが罪を求むるに不可得なりと答へた、ソコで慧可が我れ汝が爲めに罪を懺し了るといふたといふ話がある。罪惡其者を滅し去る所が懺悔だ。懺悔は過去の罪惡を滅するよりも將來の罪惡を防止するに最も力のあるものです。過去は過去として葬らしめよ。將來之れを二度せじと誓ふ所に懺悔はある。されば懺悔は自ら救ふの力で。人は此一法によつて自ら陷らんとする罪過より免れることが出來るのである。懺悔は慚愧なり、敢て形式によらぬ、又告白をも要せない、心にひしと慚愧の念を抱くの時、心裏の靈光はこゝに輝きて自ら救ふことが出來るのである。予の聽ける中に、或る高利貸が唯だ利に走つて貧焚他くなく、隙あらば乘じて他の財を奪ふことを目的として居つたものが、或る人が金を返す時に受取も要らぬ、證文も要らぬ、人として君を信ずるといふたので、世にはかゝる心の清きものあるかと慚愧の念初めて心に萠し、黯然として其非を改めたといふ話が

ある、これらは形式によつたのでもなく告白したのでもないが、心に慚愧の念を起して、事實に於て之を改めた、事實に於て之れを改めれば仰々しく之れが懺悔でござるなぞと告白するには及ばぬと思ふ。

併し懺悔の流行は咀ふべきものではなく、喜ぶべきことである、人は之れによりて自ら救ひ、心は之れによりて向上することが出來るのである。日々の反省は之れ日々の懺悔である。吾等は日々の反省によつて日々に懺悔し、歩々向上の大道を辿らねばならぬ。

クリストはいふ「天國は近づけり悔改めよ」と、又いふ、

われ爾曹に告ん、此くの如く一人の罪ある人悔改めなば悔改むるに及ばざる九十九人の義人よりも尙ほ之に於て喜あらん、

と、釋迦はいふ「慚恥の服は諸の莊嚴に於て最第一とす」と、又いふ、

百年の垢衣も一日に洗ひて鮮淨ならしむべきが如し、百千刼の中に集むる所の諸の不善の業も、善く順いて思惟せば佛法の力を以ての

◎性格の變換

故に一日一時に盡く能く消滅すべし、

と、悔改は新生命を得る所以にして、懺悔は佛性徹見の段階なり、されば吾人は此至心懺悔によりて或は漸に或は頓に其性格を變換することを得べし。

懺悔は善に向ふ性格の變換なり。惡に向ふも亦頓あり漸あり、其漸なるものは慣習の致す所にして其頓なるものは心機一轉、從來の人生觀を變換して大墮落の境に陷ることあり、彼の鑄掛け松が、兩國橋上孜々として働くの時、橋下に絃聲の起るを聞きて、「あれも一生これも一生、どうせ一度は死ぬる命、太く短く暮らすが當世」と鑄掛け道具を投じ去つて强盜と變化せる如きの例實に少からず、唯だ彼の懺悔の動機の內省的なるに反して、墮落の動機は多く外界の事情に支配せらるゝ所いふ、

犯罪を爲すものは犯罪者其人なりといへども、犯罪者をして罪を犯すに至らしむるものは社會即ちこれなり。

と、又いふ

年々現はるゝ所の犯罪は吾人の社會的組織の必產物なるに外ならざるが故に、之を改造するにあらざる以上は到底犯罪の減少を見る能はず。

と、罪惡の動機、墮落の原因が主として此外界の事情に因せるや疑ふべからず。されば罪惡を減じ墮落の機會を少くせんには上來しば〳〵述ぶる如く自己の何たるやを知り、其心裏に潛める眞我を認めて徒らに外境の爲めに動かされざる精神を修養すべきはいふまでもなけれど、他面に於ては社會組織の改善に注意して罪惡の動機を與ふるなきを計らざるべからず。

五　人格の感化

◎人格の感化

社會、個人を動かし、個人、社會を動かす。社會の個人を動かすものは應化の作用にして、個人の社會を動かすものは類化の作用なり。類

化の作用とは外界をして自己に同化せしめんとする性能にして、應化とは自己を沒して外界に服從するの性能なり。識見低く主義定らざるの徒は唯だ他に順應することを知て、自ら守る所あるなし、彼等は唯だ社會の風潮に支配せられて輕佻浮薄全く自をして他に屈從せしめ其遲れんことを之れ恐る。之れを平凡の徒とす。少しく識見あり主張あるものは皆な他をして自に同化せしめんとす。他をして自に同せしめんとするに二あり、一は世の所謂先覺の士にして社會の風潮を指導し、現代の缺陷を救ふて一層完全なる域に進ましめんとするものにして、他は頑迷固陋、徒らに過去の社會を追慕して現代を咒詛するものなり、いづれの世いづれの時といへども平凡の徒を中間に挾みて此二大思想の衝突せざるはなし、これ實に社會進運上已むを得ざるの勢ひにして社會は實に此二者の衝突軋轢の中に其趣くべき道途を發見するものたり、されど頑迷固陋の徒の云ふ所は唯だ進むを知て積習の勢力の偉大なるを忘れたる急進論者に對して反省を促すの料たるに止りて社會の

進運に向て貢献する所大ならす。社會の進運は常に此先覺の士に導かれ、歩々向上の途に就くべきものなり。これをこれ個人、社會を動かすといふ、往古來今、社會發達の歴史を見るに多くはこれ個人の運命によりて左右せらる、織田出で豊臣出で德川出でゝ撥亂反正の功成り、ルーテル出でカルヴイン出でゝ宗教改革の事成る。シーザーあつて羅馬の覇業其緒に就き、成吉斯汗あつて空前の大帝國は地上に現出すまことやカーライルのいひける如く世界の歴史は英雄の傳記にして群民は唯だ之れに導かれゆくに過ぎざるの觀あり。嗚呼社會に動かさるゝ個人は凡俗の徒にして個人を以て能く社會を動かすものは英雄なり、英雄は凡俗を超絶す、万人に過ぐるを英といひ、千人に過ぐるを俊といひ、百人に過ぐるを豪といひ、十人に過ぐるを傑といふ、英俊豪傑は能く他をして自に從はしむ、これ實に彼等が人格の力なり。然れども、英雄の事業は唯だ彼等が個人の力によりてのみ成功し得べきにあらす、又實に彼等をして之れを爲さしむるの社會狀態に待たざるべか

らず、英雄は龍なり、社會狀態は雲なり。龍此雲を得て初て力あり。其識如何に人に秀れ、其智如何に他に過ぐるとも、之れを施すに時を得ずんば、蛟龍終に地中に潛まざるを得ず、失意落魄、世と相容れざる狷介の人となり了る。所謂天才の不幸なるもの之にあらざるなからんや、天才は廣義に於ける英雄にして、英雄は廣義に於ける天才なり。共に凡俗に超越し、其事業に於て殆んど天與の才能を有す、彼等は其天與の才能を自覺するが故に他をして自に類化せしめむとし努力奮鬪、或は弓折れ矢盡きて知己を千載の後に待ち、或は功成り名遂げて益〻自己の勢力を膨脹す、時に順逆あり、事に難易あり、成敗を以て遽かに判すべからずといへども、彼等が自己を以て社會の中心とし、自己の偉大尊嚴を信ずるや一なり。殊に靈界の偉人と稱せらるゝ宗教的大天才に至ては自己を神視して他を服從せしめんとし、釋迦は「天上天下唯我獨尊」と自任し「一切衆生は悉く是れ吾が子なり」とて之れが救濟を企て、基督は「我は救世主なり」と絶叫し、

爾曹、心に憂ることなかれ、神を信じ亦吾を信ずべし

といひ、恭謙、孔子の如きも「天德を我に生ず、垣魋、それ吾を若何せんや」と自信したり。自信は力なり。以て人を動かすに足る。ナポレオンのアルプスを越へんとするすや、人皆な其難を思ふ、彼れ揚言して曰はく「世豈我を妨ぐるのアルプスあらんや」と此自信は彼れが士卒に險を越え峻を攀づるの力を與へ、德川家康の關原陣に臨まんとするや、人あり、止めていふ、「今年西方塞けり請ふ年の改むるを待て」と家康聽かずしていふ、「西方塞がれば我討て之を破らん」と、これこの自信は士氣を策勵して終に大捷を得せしめたる力にあらざるなからんや。況んや教を布き道を說くに於て這箇の自信は人を魅して感仰措く能はざらしむ。これ自我の擴張なり、人格の感化なり、人を動かすものは人より大なるはなし。吾人が英雄の傳を讀み、若くは眼前、偉人天才に接せるの時、吾人は不言の間に其感化を受くること頗る大なるを覺ゆ、エマーソンいふ、

◎人格の感化

偉人に接すれば吾人の思想行爲、容易に偉大となるの感あり。――と、マッケンジーは品性修養の典型として偉人の感化を說き

此くの如きの典型は從來しば〳〵全國民全人民の師表として選擇せられ掲示せられたり、例へば釋迦基督ソクラテースの如きこれなり、其小規摸なるものに至ては、數多の英雄傳ありて正しき行動の模範とせらるゝのみならず、又心と情との正しき態度の模範とせらるゝのみならず、誰か身を貧苦に起して終に米國大統領の榮位に上れるガアフィールドの傳を讀んで發奮せざるものあらん、誰か博愛仁慈なるナインチーゲルの事を聽いて欽慕の情を起さゞらん、自ら持する秋霜の如き人に對しては肅然として容を改め、人に接する春風の如き人に對して身亦百花堆裏にあるの感あるは吾人の常情なり、彼の宗教の人を動かすに力ある所以のもの主として此人格の感化に由るにあらざるなきか、如何に其理高く其想深くとも釋迦の人格を除いて佛教の勢力何の處にか存すべき如何に熱烈の信を示し、敬虔の心を說くとも、基督の人格を

以てするにあらずんば、何ぞ今日の盛況を呈せん。見よ、日蓮の信徒に日蓮の面影あり、親鸞の信徒に親鸞の遺風あるを。人を動かすものは人たらざるを得ず、吾人は其感化の長短、廣狹によりて其人格の大小をトし得べきを想ふ。一村の師表たるものは一國の師表たるものに及ばず、一國の師表たるものは世界の師表たるものに及ばず、一代に忘れらるゝものは沒後尙ほ其名を慕はるゝものに如かず、千年を感化するものは百年を感化するものに優る。百年を感化するものは十年を感化するものに優り、人は死するの時あるべきも其感化は人と共に亡びず。楠公一生の事業は六百年前湊川の露と消えたれど、其感化は皆な尙ほ邦人に敎ゆるに忠魂義魄を以てし、ソクラチース死して三千年、其遺風は今尙ほ生きぬ。これをこれ人格の不滅といふ。吾人は靈魂の不滅を信ぜず、然れども人格の不滅に至りては終に之を信ぜざるを得ざるなり、肉に死して靈に生きよ、個人に亡びて社會に存せよ、人格は不滅なり。

◎人格の感化

下　養成法

一　修養の時代

個人相集りて社會を成し、相互の人格を尊重し之れを傷くることなくして其福利を計らんが爲めに政治經濟の機能あり。蓋し政治と經濟とは社會組織の二大運營にして、一は以て社會の秩序を維持し、他は以て生活の利便を計り、共に俱に共同の美を成して其進歩發達を企つ、此二大機關の外に教化機能なるものあり、自然的狀態に於ける人を化して社會の成分たるに適せしめ、更らに向上發展、此社會をして歩々理想の境に近づけしめんとす。人格の養成は此機能に待つ所多し。先きにもいふ如く人格の成立には先天的の要素と後天的の要素とあり。其先天的なるものは容易に改め難しといへども、後天的なるものは教養の如何によりて變換し得べきものたり、教化機能は實に此職責を荷

るものにして教育の目的は又之に外ならざるべし。社會に此教育なるものあつて、人は未生以前の文運を習得して自然狀態を離れ、進んで現社會の一員として活動するの資格を養ひ得べし、既に現社會の一員なるの資格を養ふ、進んで又現社會を進歩向上せしむるの志望なかるべからず。されど所謂教育なるものは現社會の一員にして遺憾なき性格を作るに止りて進んで其進歩向上を計るに於て未だ到らざるものあり、此に於て吾人は所謂教育以外に修養の必要なるを認む、修養とは自ら教育するの謂なり、自ら教育するものは能動的にして人に教育せらるゝは所動的なり、所動的なる教育は一定の時期に限らるべきも、能動的なる修養は全生涯に亘る、修養は全生涯に亘るが爲に、人は死に至るまで之を止むべきの期なかるべきも、其最も必要なるものを人生の危機たる青年時代とす、此時代に於ては既に教育の力によりて從來の衝動的自然的なる動作を脱し、略ぼ人類の本務を意識し、社會の狀態をも知ることを得べけれども、尚は未だ衝動の拘束を脱する能はず、

加ふるに此期に於て初めて發し來れる性欲は、人をして墮落の深淵に沈めしめんとし、意志未だ鞏固ならず思想未だ健全ならざるが故に徒に外界の事情に動かされて事、志と違ひ、終に一生を誤るに至ること少からず、想ふに青年の時代は人生の春なり、情に激して知慮を欠き、空想にあこがれて現實を忘れ、夢の如き虛榮に醉ひ、幻の如き名利に迷ふ。理性と感情とは心裏に衝突し、薄志と知つて改むる能はず、弱行と知つて勵ます能はず、終に情に任せて放縱の生活に入り、理に責められて煩悶懊惱、身を置くに所なし加ふるに生活の困難は初めて此期に於て感知せられ、從來は父母の膝下にあつて從屬的に養はれたるもの、今は主となりて之を經營せざるべからざるに至り、幾多の艱苦は我が前に横はり、自由の我は拘束せられて一歩も動く能はず。此時に當りて之を慰め之を導くものなくんば、彼等の運命は墮落か放縱か狂か、死かあるのみ、修養の必要なる此期より甚しきはなし、されど青春は生涯の段階なり、人生の第一歩なり。此第一歩にして修養其法を

誤らず、此段階にして向上の途を失はざらんか、其人格を完成し其品性を淘冶する此時より善きはなし。青年の時代は最も修養を要するの時代にして又最も其功を奏し得べきの時なり。煩悶可なり、懊惱不可なし、山雨一過して樹いよ〳〵青し、煩悶懊惱は汝を玉成する所以なり。曾て逆境の青年に與へていふ。

◎順逆二門なし、順といひ逆といふ等しく汝が胸裏にあり。自ら逆境に沈淪せりと思惟せる青年よ、汝は好運の兒なりげるよ、世には順の逆なるものあり。逆の順なるものあり、汝は實に逆の順なるものなり。

◎學ぶに資なく、食ふに道なきは逆境に類すといへども、峻山嶮嶽を跋渉し來りて興趣轉た深きが如く、難を排し患を除くの裏に他の知り得べからざる快味あるにあらずや。

◎汽笛一聲、夢を載せて百里を過ぐるもの樂は則ち樂なりといへども、竹杖草鞋、雨に苦み風に惱み、踏破す幾山河にして到れるもの興趣は終に解すべからざるなり。逆境は天が汝を玉成するの恩寵にあらず

や。要は汝の意氣にあり。汝の意氣にして衰ふるなくんば汝の逆境は汝の恩寵なり。

◎汝の心をして向上の一路に捧げ、現下の順逆を以て左右せらるゝなくんば、汝の今の境涯は樂しき境涯なり。安らけき境涯なり、望みある境涯なり、慰めある境涯なり。

◎境によつて心を轉ぜらるゝは凡夫兒のこと、大丈夫は須く心によつて境を轉ずべし、若し閑事の心頭に掛るなくんば便ち是れ人間の好時節。

◎順逆は待對の相にして我が心は直に絶對の性に達すべし、心を此性に安立し待對の相に接す。逆順縱横、與奪自在、彼の徒らに境遇の爲めに心を惱まして元氣沮喪何の爲ぞ亦何の爲すなきの徒たるのみ。

◎臨濟大師曾て四科簡を說く、曰く奪人不奪境。曰く奪境不奪人曰く人境俱奪、曰く人境俱不奪と而して其最上の機と爲せる者は人境俱不

奪の境にあり。如何なるか、これ人境俱不奪、大師いふ、王登寶殿野老謳歌と前の人奪俱奪によりて絶對の性に安立したるもの、之に待對の相に接し來りて人境俱に奪はず。王は寶殿に登り野老は謳歌す。眞にこれ南北東西活路通し、脚頭、脚底清風起るの慨。

◎予を以て徒らに禪家の口扮を學んで、冷眼世を觀るものと爲すこと勿れ。予の云はむと欲する所は順といひ逆といふは一時の假相にして唯だ之れに動かさるゝなきの心を養ふを得ば逆を轉じて順となすの活手段も難きにあらざるを云ふのみ。

◎昔親戀の罪せられて越後に流さるゝや、彼れ此逆境にあつて却つて喜悅の色あり『自らいふ、我れ罪せられて此地に流さるゝにあらずんば、如何か我が念佛の法義を此邊阪の地に布かん』と彼れは配所を以て好個の布敎場となしたりしなり。

◎英雄は瀑布の如し、能く道なきに道を造る、直下數千丈、「巖をもくだき落ちなん心地して空にとゞろく山の瀧つせ」の光景は逆境が產み

成せる壯觀にあらずや。

◎逆境は幸福なり、以て汝の伎倆を玉成するに足る。逆か順か、順か逆か、大道坦然、一に汝の心にあり、偶感數則、以て逆境の青年に與ふ。

逆境の幸福なるに比して順境は不幸なり、古來何人か順境によりて成功せる。三個の林檎を以て二日間の飢を凌げるゾラは佛國の大文豪となり、穿つべき靴さへ持たざりしジョンソンの名は世界文學史上の花となり。基督は逆境に死して其靈や死せず。釋迦は觀樂極りなき順境を棄てゝ三衣一鉢の逆境に入り以て人生の救主となり。豐公は逆境に出でゝ位、人臣を極め、漢の高祖は逆を轉じて順と爲し以て盛名を史上に垂れぬ。順は滿なり、滿は虧けざるを得ず、シーザーは滿に處して斃され、清盛は滿に在つて亡ぶ、戰國の奇傑山中鹿之助、常に三日月妙見大菩薩を拜していふ「滿るものは虧く、新月は正に滿たんとす、之れを拜せずして何をか拜せむ、我はこれを拜して我に艱難辛苦を下

し賜はんことを望む艱難辛苦は實に我が力量を試むるの好機會なれば」と言、頗る奇矯なりといへども、以て大丈夫の心事を見るに足る。順にあつて誇らず、逆にあつて撓まず、心を向上の一路に注ぎ、自己の心膽を練養するは青年期に於て最も必要なり。蓋し少年は順應の時代にして青年は奮鬪の時代なり。此時代を經過して攝受の時代に入れば超然として順逆の外に立ち、興奪縱横、殺活自在の境に入らんか。

二　常識の涵養

修養とは自ら敎ふることなり。自ら敎ふるとは何ぞ、通常所謂敎育なるものは自然狀態にある人を導きて現代の社會に伍するの資格を養はしめ更らに向上發展の道途を指示するものにして學校敎育の目的實に此に存す。されど社會の進運は一日も止ることなければ、吾既に敎育せられたりと認めて自ら敎ふるを怠るの時は、我は既に一歩を現代の人に遲るゝものなるを知らざるべからず。他によりて導かるゝ學校敎

育の如きは一定の時期に限らるべきも、自ら教ふるの修養は終に限らるの期なきなり。これを限るの時は社會の進運に落後して終生追及する能はざるに至るの時なり之れを之れ思はず、彼の學校教育を以て一切の終りなりとし、自ら教ふることを怠らんか、曾ては秀才を以て目せられたるの士も終には時勢遲れの愚物となり了ることなしといふべからず。教育は投資にあらず。之れによりて官吏たり教員たり會社員たり技師たるの職業を買はんとするは妄の最も甚しきものにして教育の要は人の人たるの資格を養ふにあり人の人たる資格を養ふて而して後、官吏たり教員たり會社員たり技師たるを得べし、職業は末なり、人格は本なり。本を忘れて末に走る。徒らに職業の爲めに人を教育するを知て、人格の爲めの教養を忘れたるは現代の痛弊にあらずや。職業を主とするが故に僅に職業を得れば其教養を中止し、終に社會の進運に貢献する能はざるに至るもの少からず、吾人の所謂修養は人としての修養なり、既に人としての修養をいふ、人は終に死に至るまで之れ

を忘るべからざる人生の一大要件たり、これを忘るゝ時は其人の社會的に亡びたる時なるを知らざるべからず、さらば如何にして自ら教ふべき、人心に智情意の三面あり、學校教育に智育、情育(美育)意育(德育)の三方面あるが如く、吾人の修養にも亦自ら三個の方面あり。其智育に屬すべきものは常識の涵養なり。其情育に屬すべきものは趣味の啓發なり。其意育に屬すべきものは意志の鍛錬なり。意志の鍛錬なくんば世活社會に立ちて奮鬪の生活を送る能はず、趣味の啓發なくんば性格は墮落し、品位は失墜せん、若し夫れ常識の涵養を失はんか、現代の人と伍する能はざる迷妄の徒となり了らむ、人は地を離れて生存し能はざるが如く、如何なる偉人傑士といへども、現代を離れて生くべきにあらざれば識見はよし千古を曠うするとも、そは眼のことなり足は終に現代に置かざるべからず。吾人は先づ常識の涵養より漸次三方面に渉りて論明する所あらん。

常識とはもとより智の一面にのみ偏するものにあらず、智と情とを調

和して万人の認めて眞と爲し善と爲し美と爲す所を以て諸事を判斷しゆくの見解也、常識即ちコンモンセンス（Common sense）なる語を解せんには、之れと對比すべき學識なる語を解するを便なりとす、學識とは專門科學の研究に基ける見解にして、時に通俗の認むる所のものと一致せざることあり、一致せざることありといへども學識は時代の先覺者なり、吾人は之れに敎へられ、之れに導かれて智識の發達を計るべきも、万人悉く万事に對して專門的智識を有し得べきにあらざれば吾人は先づ万人の認めて一致し得べき常識を涵養し、此常識を素地として自己の修めんとする學科に對しては專門智識を養はざるべからず、然らずんば如何に專門學科(學識)を修養したりとも、之れを現代に應用するの道なく、空しく寶玉を抱いて地中に埋れざるを得ず、之れを現代に應用して世を敎へ民を導き常識を向上に貢献せんには、自己も亦常識の涵養なかるべからざるは自明の理にあらずや。水に溺れたるものを救はんには自己も亦水に入らざるを得ず、自己、水に入ることを知

らずして他の溺れたるを救はんとするの不可能なるが如く、常識なくして其學識を應用せんとするは殆んど爲し能はざることにあらざるなきか、吾人は彼の蘇國哲學者トーマス、リードの如きの唱へたるが如く常識萬能主義を執り、之れを以て認識、信仰、道德の基礎と爲さんとするものにあらずといへども、常識は現代智識の集合なり。之れを無視して更らに發展の途を盡さんとするは地を離れて步ゆまんとするものなり、想ふに學識は常識の先驅にして、今日の常識は蓋し過去學識の積習なる如く今日の學識は亦未來の常識となつて人智の進步を計るべきなれば、世は一日も學識なかるべからずといへども其學識は常に常識の上に建設せられて初めて有効なるを知らざるべからず。更に語を換へていへば學識は研究に屬すべきものにして常識は其研究の結果萬人の認めて正しと爲すに至りしものなり、地球を以て圓形なりとするは今日何人も正しと認むる常識なれど、過去に於ては一個の學識として存在せしに過ぎざりしなり、若し夫れ今日尙ほ此圓形說を信せ

ずして過去の萬人が認めたるが如く平板なりと云ふものあらんかこれ學識に背くと共に常識に背反するものにして名けて妄識といふものこれなり。妄識は萬人の認めて不正とするものにして學識は未だ其正しと認むるに至らざるものなり。世には常識なくして學識あるものあり常識なくして妄識あるものあり。此妄識を打破するは社會進歩の上に於て最も必要なることにして之れを爲すには常識の力に藉らざるを得ず、而して此常識を導くには學識に藉らざるを得ず、然れども學廣く科多く、萬人をして同じく研究の態度を執らしむる能はざるが故に吾人は專門の學科に對して研究的態度を忘るべからずと共に一般普通に對しては妄識を打破する常識の涵養を怠るべからず。

讀者よ、吾人を以て徒らに常識に謳歌して學識を無視するものとなすこと勿れ。常識の修養には常に學識の先驅なかるべからざることは既に之れをいへり、されば吾人はよし自ら研究の位地に立つ能はずとも、他の研究の結果によりて自己の常識を進むることを忘るべからず、學

藝の發達は社會の進歩なり、其進歩に伴はんとする吾人の常識は一日も其修養を怠るべからず。若し夫れこれを怠ること數年ならんか曾ては健全なる常識と認めたる事實も今は妄識となつて世の嗤笑を買ふに至ることなしといふべからず。されば奈何して常識を涵養すべき、曰く讀書、曰く觀察、書籍は知識の總府なり、過去幾千年人類が研究し思索したるの結果は悉く此に積集せられ、居ながら古人に接し、坐して東西に遊び、治亂興敗は眼前に現れ、人事輻湊紙上に明かなり。

讀書は實に常識涵養の第一要件にして、之れを廢して殆んど他に策を求むべからず、殊に地上の諸現象を網羅して洩すなき地理書を讀むが如きは實に常識涵養の捷徑たり、見よ、一卷の地理書の上には天文地文の狀態より各民族の政治、經濟、風俗、習慣、教育、宗教を記述して殆んど現代智識の全般を知悉せしむるにあらずや。地理と相關聯して吾人の常識滋養を助くるものは歴史なり。上下茫々五千載、人智の發達、人情の變遷收めて一卷の中にあり、往を以て來を推し、今を以

て古を量る、地理は空間的にして歴史は時間的なり、空間以外に物なく、時間以外に事なし、吾人は専門の研究若くは一定の職業に旺掌して常識涵養に暇なきの人士に對して此捷徑あることを知らしむるの必すしも無用の冗言にあらさるべきを信ず。

然れども常識の涵養は是等剛剛氏に付したるもののみを讀むべきにあらず、別に印刻せられざる一大書籍ありて汝が目前に現はれ汝を敎へ汝を導かんとす、之れを社會といひ之れを讀むことを觀察と稱す、社會觀察亦實に常識涵養の一大要件なり讀まざるものは所謂「世間見ず」となりて世態人情を悉くす能はじ。社會は公開せられたる一大書籍なり、擅に汝の讀むに任す、人は又人を知らざるべからず、社會の觀察は人をして人を知らしむるなり。孔子云はずや、其以てする所を視、其安んずる所を察す、人焉ぞ庾さんや、人焉ぞ庾さんやと、社會は人の集團なり、其以てする所を視其由る所を觀、其安んずる所を察す、人焉ぞ庾すものならんや、吾人は社會の觀察によりて人を學ぶことを得

べし、古來英雄の人心を收攬する所以のものは能く人を知るにあり、人を解せずして人事を處斷せんとす、其誤らざるもの蓋し尠し、人は理のみにて制せらるべきものにあらず、又情のみにて化し得べきにあらず、人々其個性あり、理に傾くものあり、情に傾くものあり。世事に通曉する士は能く其傾く所を知て其人を用ふ、これ其人をして知己を感せしむる所以にあらざるなきか、サアトーマス、ブウランいふ、人の顏面には一種の特色ありて之れに因りて其人の性質を讀み得べきものなりと、人を知るは明なり。此人を知るの技は獨り精到なる社會觀察に於て涵養し得らるべきものとす。彼の深宮に育ちたる人々が自を以て他を推して大滑稽を演せる。圖書堆裏に沒頭せるものゝ論議の世に容れられざる多くは此に因す、常識の涵養には此觀察を忘るべからず。

三　趣味の啓發

精到に社會を觀察せん乎、人事は唯だ實用の方面にのみ活動するもの

にあらずして別に無用の用あるを發見し、仔細に人を究めん乎、人は冷やかなる理智のみを以て律すべきものにあらずして理智以外に燃ゆるが如き情熱の存ずるを知らむ。社會に此餘裕あり、人に此情熱あつて生活に趣味あり、人生に慰安あり。趣味は理論にあらず又實用にあらず、理論を超絶して人を支配するの力なり、實用を離脱して社會を動かすの力なり。吾人が人格養成の一要件として趣味の啓發をいふもの豈に偶然ならんや。

趣味とは美を享受するの性能なり。美に數種あり、人の嗜好も亦各異ならざるを得ず。甲の好む所、乙必ずしも之を好まず、丙の美とする所、丁必ずしも美とせず、理論は万人を一致せしめ得べきも、趣味は万人共通ならしめ得べきにあらず。或者は花を愛し、或者は月を喜び或者は音樂を樂み、或者は繪畫を好む、されど、こは些末の上に於ての差にして其大体に於ては共通の點なきにあらず。暫く美を五官によりて分類せんか、觸覺によりて享受する美あり、味覺によりて享受す

るの美あり。嗅覺によりて享受するの美あり。是等を低級官能の美といふ、低級官能の美は性慾と相關聯すること多く、常に直接其物に接して得るの快感にして、猫の毛の柔軟なるを愛し、初袷の着心よきを好むの類は觸覺にして、食物の嗜好の如きは味覺に屬す。これらの趣味のみあつて、其以外に何等の趣味をも感せず、花より團子を愛し酒なくて何の己れが櫻かなと絶叫する徒の如きは其品格の下劣なる士君子の齒するを欲せざるに至るもの少からず、嗅覺は前二覺に比して稍々高尚なるものにして直接其物に接して受くるの快感なりといへども、前二覺の如く其物自体にあらずして其物より放つ香氣が空氣に混じて我が鼻に入るものにして、時に味覺の煽動者となつて下劣なる趣味を激發することなきにあらねど、又時に高級官能の媒介となること少からず、馥郁たる梅か香を愛し、涼しき蓮の香を喜び、又は立ちのぼる香の煙に心神を養ふの例これなり。聽覺と視覺とは美の高級官能に屬するものにして、彼の綿蠻たる黄鳥の聲を愛で、閨の戸たゝく水雞の

音を喜び、或は谷川の流に心耳を澄し、松吹く風に俗腸を洗ふは聽覺美に屬し、悠然山に對して白雪の徂徠するを樂み、道の邊の名もなき艸花に想ひを寄する如きは視覺美たり。更らに人爲の美術に見んか、音樂歌謠は聽覺に快感を與へ、繪畫彫刻は視覺に快感を與ふ。

又別に歌舞演藝の如く此二覺の混合より成るものあり、これらは共に美の高級に屬すといへども、これらの中にも亦幾段の高低あり、彼の性欲と相關聯する卑猥の繪畫、鄭衛の音は下劣なるものにして、人をして神韻漂渺たらしむる丹青、金聲玉振の樂は高尚なるものなり。かつぼれ茶番の類は野卑なるものにして能樂の如きは文雅なるものなり其好む所に依て以て其人品を卜さるべければ、低を去て高に向ひ、野を去て文に趣かしむるは、これやがて人格を向上せしむる所以にして吾人の所謂趣味の啓發たるもの之れに外ならざるなり。

尙ほ別に趣味の高低を判ずるの一標準あり、そは其好む所の主我的なると愛他的なるとにあり。主我的とは唯だ自己を喜ばすことを知て其

事の他に如何なる害毒を與ふるかを考慮せざるの嗜好にして彼の貪婪飽くなく徒らに金錢を集むるを以て唯一の快樂として他を苦め世を毒するものゝ如き、或は賭博に類似せるの遊戯を喜むで自己の勝利に悅喜して他の不快を顧みざるが如き皆な此の此主我的嗜好に屬す、これを彼の他を見ること自己の如く同情博愛人を救ひ世を救ふを以て樂みとするものに比して其差幾許ぞや、古の賢王は民と共に樂む、吾人も亦世と共に樂むに至て其人格の更らに大なるを見る、同情は趣味の源泉なり。心に同情あつて山に對し水に對し、花に對し月に對す、自然の妙趣は我が心を動かす、況んやこれを以て人に對す、天下何の處にか惡感あり、何の處にか醜汚あらん、人生をして慰安あらしめ、生活をして悅樂あらしむる所以のもの此同情に過ぎたるはなし。吾人は亦主我的嗜好を轉じて愛他的趣味に向はしむることを講せざるべからず、見よ自ら愛して他を思はざるものと他を見る自の如く、其難を聞ては之れに趣かんことを思ひ、其急を見ては之れを救はんことを計るの人と、

品性の高下瞭然たるものあるにあらずや。

既にいふ如く同情の涵養は趣味啓發の第一義なり。内に之れを養ふて山容水態に接し、

吾神如水水吾神、驅雨起烟皆是眞、
閣上見人忘彼我　畫中人畫畫中人、　（失名）

たるに至り、一もとの花に對しても、山路來て何やらゆかしすみれ艸（芭蕉）の興趣を感じ、小さき動物に對しても

麥わらの家してやらん雨蛙　智月
寢返りをするぞわきよれきりゝす　一茶

と可憐の情を寄せ、天空に懸る月を見て、

月やわれわれや月かとあかぬまで

心も空にすめる夜の月　（失名）

渾然融合、月や我、我や月たるの境に至るの時、無限の興趣油然として湧く、吾人は人爲美よりも自然美の愛好によつて人格更らに高雅に

趣くべきを想ふ此自然愛好の念を啓發し、同情の涵養と密接不離なるものを文藝の趣味とす、文藝は一切を淨化す。

俳諧は物を憐むの事を要領とす、物を憐むとは艸木の霜にあひ鳥獸の寒暑に苦むなり、されば常に風したる乞食に向ひても、きたなしと思ふ念起らば一句に結ぶこと難し、不便と思ふ心は則ち風雅の一句なり。（寂　栞）

詩人は必すしも其能く詩を吟ずるにあらざるなり、果して能く胸境超絶相對温雅ならば一字を識らずといへども、眞詩人なり、其胸境齷齪相對塵俗なるものゝ如きは、終日文を咬み字を嚙み篇を連ね、牘を累ぬといへども乃ち詩人にあらず　（隨園詩話）

文藝の才とは精神一種の感動なり、作者此感動の性あり、物を見るに於て深く心に感じて自ら禁せず、是に於てか作る所ありて自家の感動を泄瀉して後、始めて平なることを得、これによりていへば文藝の才とは一種人心を感動すべき情に外ならざるなり　（維氏美學）

◎趣味の啓發

これ淨化の根底なり、人に此趣味あつて其人格を高雅ならしむ、上杉謙信は戰國の猛將なり、しかも彼れが「霜滿軍營秋氣清　數行過雁月三更　越山併得能州景、遮莫故鄕憶遠征」の詩は、人格一段を高め、太田道灌が「かゝるときさこそ命の惜からめかねてなき身と思ひしらずば」の一首は其風格を想望せしむ。英雄回首則神仙、豐公が「露に起き露に臥ぬる夢の世や、灘波の事は夢の又夢」の辭世は彼れも亦尋常一樣の殺人漢にあらざるを想はしむ。文藝の趣味は人格と密接の關係を有す、毫も此趣味を有せざるものは胸境齷齪、相對塵俗唯だ實利に狂奔して人生別に此閑天地あるを知らず、下劣なる趣味を嗜好して高雅の念なし。吾人は人格養成の一條件として趣味の啓發をいひ、其趣味の最も品性に關係あるものとして文藝趣味を鼓吹するに躊躇せず、されど讀者よ、誤て世をして悉く詩人たらしめ文學者たらしめんとするものとなす勿れ、吾人の所謂文藝趣味とは文藝に對して嗜好の念を有せよといふなり。必らずしも自ら作れといふにはあらず、否な寧ろ他の作品を愛讀

さるの趣味を有せよといふなり。吾人は此に於て又讀書の趣味に於て一言せざるべからず。古人語あり、

天下の事、利害事に相半す、全利あつて少害なきもの惟だ書のみ貴賤貧富老少を問はず、書を看る一卷なれば一日の益あり、故に曰く全利あつて少害なきものは讀書のみ

と。ゼームス、シナリーいふ、

書籍を熟讀する時間ほど面白く且つ幸福なるはなし

と、夜雨靑燈、影靜かなるの處、獨坐、書を繙く人生此くの如く快なるは少し。書は以て智見を磨くべく以て趣味を啓發すべし。北條早雲は陣中に書を講じ、唐太宗は手卷を釋てず、ナポレオンがセントヘレナに五年の殘涯を送るや、其生活費の主なるものは書籍代なりしといふ。讀書の人格に關する豈に尠少ならんや。

四　意志の鍛錬

◎意志の鍛錬

智と情とは人心の二方面なれど其中堅となるべきものは意志にあれば意志の強弱は直に行爲の強弱に關し、行爲の強弱は又直に人格の強弱に關し、意志にして其鍛錬を欠かんか、智に於て如何に正しきを望むとも之れを遂ぐるに力なく、情に於て如何に美しきを欲するとも、之れを得るに道なく終に正と知りつゝ行ふ能はず、美と知りつゝ好む能はず、先きに云ふ所の常識の涵養も趣味の啓發も何の効なきに了らん邪を制するも意志なり、醜を卻くるも意志なり、意志は王なり、能く智情を左右す、左右すと雖も亦智情の爲に動かさるゝを免れず、しばしばいふ如く智情意は便宜上の區別にして其實三にして一、渾然統一せられて自我の觀念を成し以て其人格を顯現するものなれど、其最も行爲に深き關係を有するものをいへば即ち意志なり。意志は自己を決定す。此强きものは以て磐根錯節に耐ゆべく、其弱きものは薄志弱行此活世界に於て何事をも成す能はず躊躇逡巡、徒らに心を勞して終に浮世の失敗者たるに了らむ蓋し意志の鍛錬は人格養成の根底にして一

切行動之れに因す。

されば如何にして意志を鍛錬すべき、古聖いふ「汝自身を知れ」と、吾人の上來しば〳〵繰返したる眞我の徹見は實は汝自身を知るの謂なり。相對差別の小我を離れて絶對平等の大我を認む我が心に迷ふ所なく、我が心に動く所なし。我が心迷ふ所なく、又動く所なく、我自ら宇宙の主人公となり、宇宙双日なく乾坤只一人の境に住せんか、八風吹けども動せず、泰然として世に處し、自若として事に當り身は毀譽の外に超絶して心に些の煩悶あるなし、これをこれ不動心といふ。由來我が心の煩悶し懊惱する所以の者は外界差別の現象の爲に動かさるゝに外ならじ、今心を絶對平等の境に置き、我の自ら我たる所以を悟得し、我を味ますの忘念迷夢を打破し、王陽明の所謂天理を存して人欲を去るの工夫を積まば乾坤、手に在り、万化身に生じ、應用自在接化無碍なるを得て心裏何の煩悶し懊惱する所かあらん。邵堯夫詩あり、

心安身自安　身安室自寛　心興身俱安　何事能相干

誰謂一身小　其安若泰山　誰謂一室小　寛如天地間

と、吾人は心を安んずること此くの如く、又三宅尙齋が

富貴壽夭不二心　但向面前養誠心
四十余年學何事　笑坐獄中鉄石心

の境に住せば、順境に在て驕らず、逆境に在て撓まず、西行法師が

雲にたゞ今宵の月をまかせてん

いとふとてしも晴れぬものゆゑ

の知足安分となり、西鄕南洲が「幾經辛酸志始堅、丈夫玉碎愧瓦全」の奮勵努力となる。蓋し此に云ふ所の不動心とは彼のストア派の悲哀、恐怖休欲、娛樂より起る不合理を制伏して全然境遇の繫縛、外物の誘惑を脫離し、內より自己を支配し、毫も名聞利養等の爲めに心を動かさざるアパタイアと略ぼ同義にして、先づ心中の賊を討つて外界に接し、其誘惑を脫して淤泥の中に淨く花咲く蓮華の如くなれといふなり。されば其最初に來るものは己に克つの力を養ふにあり、克己の力を以て心裏に

横行濶歩する邪念妄執を打破し、心海風濤絶え、性天日月明かなる境に住するを得ば又他に瞞せらるゝことなかるべし、澤庵和尙、曾て不動智を說ていふ、

不動とはうごかずといふ文字にて候、智は智惠の智にて候、不動と申し候とて石か木のやうに無性なる義理とてはなく候、向へも左へも右へも十方八方へ心の動きたるやうに動きながらすこしも止まらぬ心を不動智と申し候、不動明王と申して右の手に劍を振り左の手に繩をとりて齒をくひ出し、目をいからかして佛敎を妨ぐる惡魔を降伏せんとてつゝ立ち居られ候姿もあるやうなるが、何國の世界にもかくれ居られ候にてはなし、容をば佛法守護の形につくり、躰をばこの不動智を躰として衆生に見せたるにて候、一向の凡夫怖れを爲し、佛法に仇をなさじと思ひ、悟りに近き人は不動智を表はしたる所を悟り、一切の迷を晴らし、即ち不動智を明らめば、此身則ち不動明王ほどに此心法をよく執行したる人は、惡魔もいやまさぬぞ

と知らせんため不動明王にて候、されは不動明王と申すも人の一心の動かぬ所を申し候、我が身を動轉せぬことにて候動轉せぬとは物事に留らぬ事にて候、物一目見て其の心を止めぬを不動と申し候、

不動明王の形相は之れ心内の敵を打破する意志鍛錬の御姿なり、吾人は先づ己れに克ちて心内の敵を伏し、心を此不動地に置かざるを得ず心を不動地に置くとは相對差別を脱離したる絶對平等の境に安んずるなり、絶對平等の境より出るの智これ眞智なり、不動智なり、梵語智慧を般若(Prajna)といひ之れに二義ありと稱す、一を實相般若といひ、二を觀照般若といふ、實相般若とは絶平對等なる宇宙の實相にして、山色水聲悉くこれ宇宙の大精神、花紅柳綠皆な天地の深智識なりとし之れを自己に觀照して少しも誤らざるものを觀照般若といふ。實相般若は鏡の明かなるに喩ふ、我が心に相對差別の塵汚なく絶對平等の境に住す、此明かなる鏡の上に万象差別の相を映し、應用自在、物に凝滯する所なきもの之れ觀照般若の德なり(別に文字般若なるものを算ふ

こは之れらの道理を文字に現はしたるものに過ぎず)既に物に凝滯する所なくんば、心、外界に動さるゝことなく、榮辱叢裡笑ふて事を處し生死岸頭何の喜憂するなきを得、明々瞭々大道を濶歩して自己の志す所を行ふ、人、此の如くにして初めて意志の鍛錬を得たりといふべきか、

然らば奈何して此境に到るべき、此修養に動靜の二面あり、靜中の工夫は冥想に過きたるはなく、動中の工夫は習慣を養ふに如くはなし、釋迦は菩提樹下端座六年の禪定を經て初めて大悟し、クリストはヨルダン河畔、風清き曠野の中に四十日四十夜を沈思に費し、マホメットはヒラの洞窟に冥想を凝らしてコーラン經の第一節を自得し、王陽明は靜の一字に於て悟入する所あり、意志鍛錬の法、これより善きはなし、靜かに雜慮閑想を止め、我、吾を見るこゝに悔改の情あり反省の心あり、以て我をして歩々向上の途に進ましむ、孟子いふ「万物皆な我に備る、身に反て誠なれは、樂これより大なるは莫し」と、中江藤樹」

はいふ「心裏面に常住不息の良知の主人公御座候、この君に御對面なさん工夫御勤め候へば、何時となく、浮氣除くべく候」と、冥想の効や大、暫く其要を云はむか、(冥想のこと拙著「冥想論」に詳し、今は唯其大要を擧ぐるのみ)冥想は我が亂たる心を治め、我が汚れたる心を拭ひ、我が疲れたる心を休ましむ。我か心治められて智眞明かに、我か心拭はれて以て道に向ふへく、心に此休息ありて活動の力たるべし、大なる活動には大なる休息を要す、此點に於ても吾人は靜座冥想の必要を痛言せざるを得ず、若し夫れ書を讀んで靜かに思ひを凝らし、自然に對して徐ろに想を練らんか、吾は書中の人となり、自然は我の友となり、智見更らに明かに、氣宇更らに濶きを想ふ。

動中の工夫に於ては性格變換の條下に於て縷述したる習慣力を養ふて克己反省念々心垢を淨め、歩々道義に向ひ、終に其習慣をして第二の天性たらしむるにあり常山紀談の著者湯淺常山は武士は何日切腹せざるべからざるか知り難し、其時に當りて周章するは武士の恥辱ありと

て毎朝、食事に際し箸箱を以て稽古せしが、初めには心動き胸騒がしかりつれど修行功を積むに從ひ、終に何の苦もおきに至りしといふ、

勝海舟亦意志鍛錬の逸話あり曾て人に語りていふ、

いかに擊劍の術を學ぶと雖も、而かも若し其膽にして、豆の如く小ならんには、折角練習したる劍法も、將た又何にかせん、到底其の充分なる功用なかるべし、とて或る一と年の寒夜三十日、颯々たる寒風、膚をつんざかんばかりなるを意とせず、只だ稽古着一枚のまゝ、遠く王子權現の社頭に到り、或は木劍を閃かして、立木と闘ひ、或は拜殿の椽に腰うち掛け、沈思冥想すれば、古木老杉蓊鬱たる間、轟然たる雷霆の如き鳴響あること屢ばゝにて、やがて將さに磐石の我が頭上に落ちかゝらんとして凄然たること言ふべからざれば、徐ろに眼を見開いて之を見れば、冴けき月影の、木の間漏る光りより外に物もなし、此の如きこと屢ばゝなりしが、漸く通ふ夜數多きに從ひ此等の物音次第に減じ、遂に全く此の物音なく、さしも深

夜物凄き老杉も、一種の朋友となり、毎夜笑面をもて、我れを迎ふるが如くなりしといふ、嗚呼先きの物音は是れ物體のもの音にあらずして、一種心の鎮まらぬ物音にてありしなり、されば後ち心鎮まりて、其の物音は止みたるなり。

と、習慣は終に性となりては如何なる境に處しても泰然たるを得るに至りし例、古今少からず、或は雷霆の下に坐して膽力を養ひ、或は深山に登りて精神を練り、或は求めて逆境を作りて克己の心を養ひ、或は自ら艱難に投じて忍耐の力を鍛ふ、鍛錬日を積み、修養功を累ぬるに於ては難に當りて動せず、逆に處して惑はざるの性格を作るに至るべし、よしかゝる大事にあらずとも、禁酒禁烟の如き些事をも、吾人は意志の鍛錬として日を積み功を累ぬるの工夫をば忘るべからず。

フランクリンが

攝生、沈默、規律、決斷、節儉、勤勉、正直、正義、中和、清潔、靜逸、節操、謙遜、

の十三目を立て、日夜反省を怠らざりしも、雲谷禪師が効過格を作りて

孝順、和睦、慈敬、寛下、勸化、救濟、交財、奢儉、正行、敬神、存心、

の十一目を立て日々効過を記せしめしも、張思叔が坐右銘に『凡そ語は必ず忠信凡そ行は必ず篤敬、飲食必ず節慎、字畫必ず楷正、容貌必ず端莊、衣冠必ず肅整步履必ず安靜、居處必ず正靜』とあるも、曾子の日に三び省みたりしも、皆な勤め努めて第二の天性を造らんとしたるに外ならず。

吾人は一び美の美たるを知り惡の惡たるを想ふも、之れを爲すの決意なき時は終に之れを行ふ能はず、決意ありとも之れを爲すの習慣を作らざる時は折角の決意をも中絶せしむることなしといふべからず、此美の美たるを知りて行はんとし惡の惡たるを知りて行はざらんとするを發心と云ひ、斷じて其知りたる所を行はんとするの心を決心といひ此決心を相續して中絶せしめざるを相續心といふ、此相續心あつて初

めて第二の天性たらしむるを得べし。之れを意志鍛錬の三階段とす、而して其最初に起るべき發心は如何にして生ずるやといふに、そは須く之れを靜中の工夫に得來らざるべからず、意志鍛錬に動靜の二面ありといへども歸する所は一、動處の工夫は靜處を助け、靜處の工夫は動處を助く、此二の工夫に於て怠るなくんば、庶幾くは意志鍛錬の功を奏するを得んか。

尙ほ他に一の意志鍛錬法あり、遍く動靜の二面に渉りて吾人を啓發す之れを宗教的修養といふ、宗教的修養とは自己以上の神若くは佛に歸依して自己が心神の修養を計るものにして、不公不正なる人界の毀譽に關せずして公正なる神佛の照覽に任せ、彼の西鄕南洲が人を相手とせずして天を相手とすといひける如く、人は如何に評するとも、神佛は公正に我が心を照らしたまへりとの信仰を以て事を處し、生死の如きも唯だこれ假りの世の差別のみ、露の身はこゝかしこにて消えぬとも

心はおなじ花のうてなぞ　（法然上人）

未來に希望あり慰安あるべしと信じて難に當り、彼のビスマークが「毀譽褒貶甚しき現世に於て予をして予の志す所を行はしむるものは未來の信仰あるに由る」といひしが如く、唯だ此信仰によりて意志を鍛錬するものなり。クリストいふ、

爾もし信ずることを得ば、信ずる者に於て爲し能はざることなし。（馬可傳）

爾曹もし芥種一粒ほどの信あらば、此桑樹に拔けて海に植れといふとも爾曹に從ふべし。（路可傳）

誠に實に爾曹に告ん、我を信ずるものは我が爲す所の事をなさん、且つこれより大なる事をなすべし。（約翰傳）

と、釋尊はいふ、

若し衆生あり、諸佛の所に於て一び信心を發せば、此美根は遂に敗亡せず。（大悲經）

信は道の元、功德の母なり、一切諸の美法を增長し、一切もろ〳〵の疑惑を除滅し、無上道を示現し開發す。（華嚴經）

人の手ありて寶の山の中に入りて自在に寶を取るが如く、信あるも亦爾り、佛法の中に入りて自在に無漏の寶財を取る。（仝）

と、信は杖なり。薄志弱行の者も之れによつて以て立つを得べし。吾人は敎主の人格に對して無限に信賴し其敎示を遵守し以て我が弱き心を奬まし、我が曲れる心を正し、我が汚れたる心を清む、人は此自己以上の神佛に歸依する宗敎的修養によりて靜中の工夫に光明を認め、動中の工夫に力あるを得て以て意志を鍛錬し性格を向上せしむるを得べし、蓋し宗敎的修養は啻に此意志鍛錬に於て必要なるのみにあらず遍く智情意の三方面に亘りて常識の涵養にも趣味の啓發にも頗る力あるものなれど、こゝには最も其行爲に密接せる意志の上に於て之れを云ひたるのみ。

五　處世と人格

超然、毀譽の外に立ちて毫も世と相涉らず、塵界を脫離して獨り清風に嘯き、眼中名利なく、心裏煩累なし其高風眞に慕ふべしといへども人生の本務に於て未だ欠くる所なしといふべからず、人は社會の共同生活を助け、其進步發達を補ふの義務あり、之れを之れ盡さず、獨り自ら潔うす、よし其人格の超絕せるものありとも、そは個人的に於て清高なるものにして、社會的には唯だ間接に他を感化するの外何の効あるなし、超世脫俗の生活は或意味に於ては自利的たるを免れず、若し夫れ利他を事とせむか、何の暇あつてか獨り超世脫俗を樂しまむ。源光國曾て許由の畫に賛していふ。

耳洗ふ心の水は清けれど
流れは汲まじ世を救ふ身は

と、志士仁人の世に處する須く救濟を事とすべし、世を救ひ人を導くは先覺者の任務なり、既に世を救ひ人を導くを以て任務とす、吾人の生活は塵俗の中にあつて塵俗に染まず、心は向上の一路に向はしむる

も、身は現代の人となつて世と共に樂み、時と共に進むの覺悟なかるべからず、吾人は之を名けて同情的生活といふ、同情的生活は佛菩薩の生活也、聖人君子の生活也、志士仁人の生活也、增一阿含經に「諸佛世尊は大慈悲を以て力と爲し弘く衆生を益す」といひ、華嚴經に「菩薩は唯だ衆生を敎化救護せんが爲めに大慈悲心より來る」といひ、孟子に「君子の敎ふる所以のもの五、時雨の之れを化するが如くなるあり」といひ楚辭に「聖人は物に凝滯せず、能く世と推移る」といひ、幕末の志士吉田松陰が「死して不朽の見込あらば、いつにても生くべし、生て大業の見込あらば、いつにても死ぬべし」といへるもの亦之れ世を救ふ同情迸發にあらざるなからんや、吾人も亦此同情を以て處世の要件となさゞるべからず。苟くも人に接し事に處て此同情を忘れずんば其爲す所は如何に小事なりとも之れ志士仁人の心なり、聖人君子の心なり、佛菩薩の心なり、一歩の田を耕すも此心を失はず、一錢の物を賣るも此心を離すれんば吾人の生活は常に趣味あり、吾人の心には安慰あらん、或

る人商家の道を說ていふ、商家は金を惜まざるべからず、我が金惜しと思へば、人も亦金惜しと思ふ心あるを忘るべからず、人其惜しき金を以て我が品を買ふ、我が品にして惡からんか其惜しき心は去り難かるべきも、我が品にして善からんか、惜しき心を離れて我が品を購ふべし、かゝれば我れも利を得、人も利を得て佛菩薩の行ひと同じく自利利他圓滿すべし若し此心を忘れて唯だ我れのみの利を計らんか、我品は賣ること少くして、人には金を惜むの心を離れしめ難かるべし云々

と趣味あるの言にあらずや。安田善次郎氏曾て人に語りて、

私は十九歲の時鄕里富山縣を出で、僅に一兩の旅費を懷にして江戸に着き小間物屋の丁稚に住込んでから今日に至るまで丁度五十年になります。最初は小間物屋に四年、尋で海苔屋兩替屋に二年奉公して、いよ〳〵二十五六歲の時に獨立商人となり、日本橋人形町通りに間口二間、奥行五間半の家を借りて、海苔、鰹節、兩替の商賣を

始めたが、其時私は商賣の規則として虚言を吐いてならぬ、商賣は眞心を以て客に接せねばならぬ、買人には一番善い物を賣つてやらねばならぬとの三箇條を心に誓ひ一生懸命に客の便利を圖りました然うすると其れが評判になつて今度人形町に店を出した海苔屋はなか〳〵親切だ、彼店で買つてやれと言つて、遠方の町から態々私の店に買ひに來るやうになり、開店早々ながら、望外の繁昌を得ましたとは、嘗て御話し申した通りの次第です。

私が此時の精神を堅い語で申せば、何事に係はらず盡せる丈け最良の手段を盡すといふにあつたのです。何商賣にせよ最良の手段さへ盡くせば自然と繁昌するものであると、堅く信じて居つたから、一枚の海苔を賣るにも決して忽にせず、一番善いものを撰んで賣りました。

併し乍ら一番善いものを賣るには、唯だ坐つて居ては出來るものでない、其れには非常に骨を折らねばならぬ、極度の勤勉、それで無

ければ御客を滿足せしむることは出來ません、私は此時代に於て隨分骨を折りました、粉骨碎身ともまうしますか、なか〳〵苦勞を重ねました、如何にすれば客は滿足するものであるか、如何にすれば客は愉快を感ずるものであるかと全く自分の身を忘れて客の心になつたのです。

とあるは頗る此等に適へるの感あり、同情の生活は至誠より出でたるものならざるべからず、心に至誠なく唯だ名利を思ふの念より同情を裝ふ如きものは之れ僞善者の行動にして、よし一時は糊塗し得べしとするも、忽ち他人の看破を受け冷笑と憎惡とを免る能はざるに至らむセネカいふ、假面は永く蒙り難し、忽ち其眞相を現はすと、彼の追從輕薄徒らに他の歡心を買ふもの、事同情に類すといへども、終に他の指彈擯斥を免れざるもの全然此至誠を缺如せるに由る。心に至誠を存せば假令一時は他に厚遇せられざることあるとも、漸次に其光輝を認められて終には人を動かすに至るべし。

人の我を容れざるを咎むる勿れ、唯だ己れの誠の足らざるを思ふべし。

唯だ己れの誠の足らざるを思ふ、此に於て天を恨みず人を咎めず、自ら正を正とし僞を僞として世に立つことを得べし、自ら誠の足らざるを思はず、強て世に容れられんことを望むが故に虛僞虛飾の生活となり、妄りに外見を飾りて世を瞞せんとし、終生役々外見と虛飾との爲めに勞して自ら苦め他を害するに至るもの少からず、吾人の生活は虛飾と外見とを去りたる簡易なるものならざるべからず、曾て雲棲大師自箴を擧げていふ、

○支那明季の大德雲棲大師が日常警悟の爲めに坐右の箴とせられたる詩に

屋可蔽風雨　何苦鬪華麗　堯舜古聖君　光宅天下破　茅茨未嘗剪　土堦亦不砌　不知爾何人　鱗々居大第

と、こは慈受深禪師の作であるといふことで、居宅の華麗を衒ふも

の、頂門の一針である。食、器、衣に就て大師自作の詩がある。

食可充饑腸　何苦尙腰厖　孔顏古聖師　悅心飽義理　一簞復一瓢　飯蔬食飲水　不知爾何人　肥甘滿砧儿

こは食に就て戒めたるもの、日常器具に就ては

器可足使令　何苦作淫巧　釋迦三界師　萬德備文藻　一持鉢多羅　四綴猶未了　不知爾何人　不箸嚴七寶

衣に就ては

衣可蓋形體　何苦競文飾　迦葉首傳燈　聞譽千古溢　頭陀百紆褐　老死終弗易　不知爾何人　偏身皆綺縠

と、事々に接し物々に應じ爾何人ぞと反省するは、これ修道の心得である。（修道講話）

反省すること此の如く、以て自己の虛榮心を制し、冗を避けて簡に就き、虛飾を棄てゝ實用を旨とせんか、人事の煩累其一半を減殺するを得べし、之れを之れ簡易生活といふ、人の塵界にあつて煩悶し懊惱す

る所以のもの其大部分は虚榮の心に軀られ外見の美を衒はんとし無用の思慮を凝らし無用の財を費し無用の日月を送るに由る、今此無用を去て其用とする所を見んか、簡單明晰、人事の紛々快刀を以て亂麻を斷つが如きものあらん、ワグネいふ、簡易生活は一生の使ひ方を知れる人のみ之れを味ふことを得べしと、人生僅か五十年、何の暇かあつて無用の日月を送り、無用の思慮を凝らすの時あるべき、我が力に限りて我が爲すべきこと多し、何の餘る所あつて無用の財を費すべき。簡易の生活には簡易の思想を要す、簡易の思想とは無益のことに心を勞せざるにあり。ワルレー博士坐右の銘にいふ、

汝が奈何とも爲す能はざる事件に對しては怒ることなれ、そは怒るとも無益なればなり、汝が所辨の方法を有する事件に對しては怒ることなれ、そは汝の欲する如く所置し得べければなり。

と、吾人の生涯は其奈何とも爲し難きことを爲さんとし、爲し得べきことをも先づ怒りて徒らに心を勞す。ジョン、ニュートンいふ、

吾人が一年中に負ふ所の心勞と煩累とは之を一束の薪に喩ふるを得べし、一度に之れを擡げんとすれば重きに失すれど、日毎に一本づゝを運ばんには何の難きことかあるべき、之れを之れ思はず、昨日の分を今日の分に加へ、剩さへ明日の分をも共に運ばんとするが故に自ら苦みて安きことなきなり。

と、人生の使ひ方を知るものは能く一日の分を察し、一日の事を爲すこゝに於て事に規律あり、行ひに秩序ありて無益の希望に心を痛むることなく歩々向上の大道に進むべし、されば簡易の生活は又實に規律的の生活なり、看よ、春秋其時を違へず、夏冬其節に合し日々日は東より出でゝ夜々月は西に沈む、宇宙には整然たる秩序あり、天地には一定の規律あり、我之れを身に受く、須く、自に對しては

一　日常品の配置にも所を定めて使用に便ならしめて穿鑿に無用の時間を費さゞるに注意し、

二　職業、遊技、運動等皆な規律を定めて放縱に流るゝことなく、

他に對しては

一　約諾を重んじて之れを變ずることなく、

二　至誠を旨として虛飾を避け、

三　他の規律を犯さゞることを計り

たらんには繁雜なる人生も、こゝに秩序ありて簡易なるべきを、一旦此規律を過らんか、諸事此に錯綜し來りて容易に處理し難きに至らむ。殊に處世の一大要具たる金錢の出納の如きは最も此規律の整然たるを要す、蓋し金錢收支は人格の高下に關すること大にして之れを集むることを知て散ずることを知らざるものは世に益なき守錢奴となり、散ずることを知て集むることを知らざるものは浪費者となりて世の指彈を受く、集むるに道あり、散ずるに法あり、其道を得ざれば集むるとも詮なく、其法を得ざれば散ずるとも功なし。佛源禪師いふ「君子は財を惜む之れを用ふるに道あればなり」と、用ふるに道あるが故に一厘の小といへども之れを吝まざるを得ず、しかも其散すべきに當りては百

万も吝むに足らず、金錢は有無相通じて以て社會の利便たり、之れあるが故に貴からず、之れなきが故に賤しからず、

何のその百萬石も笹の露

（一茶）

唯だ自己の獨立を維持し得るを程度とし、餘れるは之れを散じて以て社會の進歩發展に貢献すべし、彼の徒らに金錢を度外して他の扶助を受けて生存し、高言して、眼中金錢なしといふものゝ如きは社會の害物人生の寄生虫たるを免れず、ショッペンハワーいふ「獨立の生活を爲さんとす、先づ普通一般の衣食住に充つべき所有なかるべからず、之れ人生の苦酸悲嘆を免れ、社會の酸鼻冷嘲を受けざるの道なり、此に於て不羈自由の人たるを得、その時代の一員として世に立つを得べし己に一定の生計を得ば其財の千金たると万金たるとの遜底は更に羨望すべき價値あるものにあらず」と然り、千金と万金との差、日常生活に於て何かあらん、豈に啻に千金と万金とのみならんや、富者の食ふ所も貧者の食ふ所も、要は食を以て飢を醫するに止り、富者の着くる所

も貧者の着くる所も要は衣は以て寒を凌ぐに止り、金殿玉樓も賤が伏屋も、要は雨露を防ぐに過ぎず、吾人若し此衣食住に於て欠くる所なく自己の行を以て自ら生活するを得ば、之れ獨立なり、之れ不羈なり、時代の一員として世に立つを得べし此獨立不羈を維持せんが爲に一面に貯蓄の必要生じ、此世に立つの要あるが爲に他面に財を抛つの道を知らざるべからず、かくて收支法に適ひ、出入、道に違せずんば金錢の爲に人格を左右せらるゝことなし、唯だ人虛飾を衒ふて自ら利するを知らず、偶々意外の財貨を得むか、忽ちに之れを浪費して終に又窮乏を訴ふるに至るもの少からず、ドクトル、ジョンソンいふ、

富裕に生れて貨財に慣れたる女子は、嫁して後に經濟に賢し、されど貧に生れ、嫁して後に始めて金錢に接するものは散財を以て一個の樂とす、

と、金錢は一種の誘惑なり、此誘惑に打克ち、嚴として其守るべきを守り、斷として其行ふべきを行ふ、黄金も屈する能はず、威武も抂ぐ

る能はざる底の崇高なる人格は此に養成せらるべきなり。

處世の大道は以て人格向上の歩を運ぶべし、同情によりて趣味を啓發し、規律によりて意志を鍛錬す、若し其れ此間人事を觀察して常識の涵養を怠らざらんか、修養の三方面は此處紅塵万丈の中に於ても盡さるべし、何を苦むでか超世脱俗獨り自ら潔うするの愚を學ばむ。

人格の養成了

讀書と自然

一　自省箴

筆疇の一書、何人の作なるを知らず、明の林樞之れに序して曰く「句々皆己れを切にし、條々皆な用を實にす、誠に己に處し、人に接するの要道なり」と予常に以て自省の箴とす、いま其殊に己れに切なるものを擧けて讀者が反省の資に供せむ。

○書に曰く、必ず容るゝを有つて德するとは乃ち大なり、必ず忍ぶを有つて乃ち濟すと有りと。君子心を立るや容忍に成つて而て容忍ならざるに敗ぶれざるは有らず、容るれば即ち能く恕し、忍ぶれは即ち能く事に耐ふ、一毫の咈も即ち勃然として怒り、一事の違も即ち憤然として發するは、是れ涵養の力無き薄福の人なり、是の故に大丈夫當に人を容る可く、而して人の爲めに容れらるゝ可らず、當に欲を制す可くし

て欲の爲めに制せらるゝ可らず。

○

辱の一事は最も忍び難き所なり。古より豪傑の士多く此に由て敗らるゝに意ふに辱の來るや其人の如何を察す可し、彼小人ならんか即ち直我に在り、何の怒ることか有らん。彼君子ならんか即ち直彼に在り。何の怒ることか有らん。世の人辱の來る所を審にす可し、一に怒を以て之に應ずるは此れ其の相仇して相害ふ所以ならん、書に曰く必ず忍ぶと有つて其れ乃ち濟ふと有りと、意は正に此の如きのみ。

○

我れ厚きを以て人を待たんに人薄きを以て我を待たば薄きには匪ざる也。我が厚きとの未だ至らざる也。我れ禮を以て人に接せんに人虐を以て我れに加へば虐するに匪ざる也、我が禮の未だ至らざる也、厚や禮や我れ自り之を行ふ、薄や虐や我れ自り之を召く、彼れに何の罪あらん耶。是故に天を怨みず人をも尤めざらば君子に庶幾からん矣。

○

寵を妬んで勢を恃み、妍を爭つて憐を取こは此れ妾婦の道なり。近世の士大夫、權勢の人を見て爭つて相趍き附いて之れに媚び惟後れんとを恐れ、一美言を得るときは即ち喜び色に溢れ、稍此れを抑へらるゝときは即ち局脊として自ら安んせざるは、又た何ぞ妾婦の道に異ならんや、夫れ壽夭窮通は天命也、彼れ固に權勢有りとも亦天より外なる能はず、而して壽夭窮通の我れに於るをや。戔々然として以て之に諛らひ、恐々然として以て之に附くは亦愧づ可き也。

○

天に得られざるときは則ち天を怨み、人に得られざるときは則ち人を尤むるは此れ古今同じきの情なり。殊に抑揚順逆は皆人力の能くする所に非ずして皆造物之を然らしむるを知らず、造物も亦我を惡み我を好んで之を爲すに非ずして、彼も亦知らず予も亦知らず、之を爲さんとする事なくして之を爲すのみ。天を怨むる者は天を知らず、人を尤

むる者は命を知らざるものにして聖人の取らざる所なり、大丈夫の胸中灑々落々、光風霽月の其の自然に住するが如くならば、何ぞ一毫の心を動すこと有らんや。

○

蝸涎は穀に滿たざれども以て自ら濡ほすに足れりとし、高きに昇て疲るゝことを知らず、壁に粘して枯るゝことを作すと。東坡が言、深く進むを知つて退くを知らざる者の戒と爲す可し。夫れ人事の役々たるや、計謀の敞々たるや、人皆人事以て富貴を至す可く計謀以て功名を至す可しと思へり。殊に一作一輟、物之れに宰たること有るを知らず、之を爲して成れる者も其の能くしたるに非ず命の至れるなり、況んや之を爲して成らざる者の多きを、や。造物は言ふこと無ければ人は其の聽くことを感ず可らず、造物は形無ければ人は其の公を潰る可らず。世人役々敞々として百年の間に頃刻も自ら安ずる者無し、亦深く哀れむ可らざらん耶。

○

稠人廣座の中に、口を極めて議論す可らず、己の長を逞ふすれば惟だ妬を惹くのみ、抑も亦人を傷ふなり。豈に過ち有る者の其中に在ること無からんや。議論彼に至れば則ち彼言はずして心に憾む、且つ官長に對するが如きは清きを言ふときは則ち清からざる者に怒らる朋友に對して直を言ふときは則ち直ならざる者に憎まる、彼れ自ら責めずして、我れに意有つて之を爲すと謂へり。彼れ或は禍有らば我れ能く免れんや、惟言語を簡にし顏色を和げ問ふに隨つて即ち答ふる有らば可なるに庶幾からん。

○

人の病は好んで其の所長を談ずるに在り。功名に長ずる者は動もすれば輙ち功名に誇り、文章に長ずる者は動もすれば輙ち文章に誇り、游歷に長する者は、其の見る所の山川の勝に誇り、刑名に長ずる者は其の獄の情に誇る、此皆其所長を露はして其所長を養ふこと能はざる

者なり、惟智者のみ其の所長を言はず、故に其長を保つ。

○

禍は多欲より大なるは莫し、富は足るを知るより富めるは莫し。欲心勝つ上は則ち物に狗ふ、物に狗ふ上は則ち身輕ふして物重し、物重き上は則ち脅然として窮り無し、其身を喪はざれば止まざるなり。是故に聖人の聖人たる所以は其の無欲を以てなり、無欲の故に天下を視ること一家の如く、一身は猶ほ衆人の如し、遇ふ所に安んじて貧賤を以つて其心を異にせず、出る處を以つて其道を異にせず、淡然廓然たる而已。彼の物に狗ふ者は足るを知らざる故なり、苟くも足るを知らば心安んず、心安んずれば、事少なし、事少ければ家道和す。家道和すれば人和せずといふ事無し。故に曰く富は足るを知るより富めるは莫し。と。

○

世事は一を執て觀る可らず、時に隨つて詳審ならんを要すれば可なり。

彼貴ければ此賤しく、此貴ければ彼賤し、循環往來恒に定まれる勢無し。然れども古人富貴を儻來る物なりと言ふ、殊に貧賤の者も儻來る物なることを知らざるなり。其來るや禦ぐ可らず其去るや止む可らず、往來冥々の中に係つて人力の能く及ぶ所に非ず、世人貧賤を憂ふること虎狼の如く、富貴を慕ふこと菊蒙の如く、曲計の心を巧にし務めて此を去て彼を留めんと要す。噫、遑々汲々是れ徒らに然る耳。

○

之を言ふの難きに非ず。之に處するを難しと爲す。士大夫安居の時、人の患害を憂ふるを見れば則ち曰ふ、是何ぞ吾が恤となるに足らんやと。人の貧賤を恤るを見れば則ち曰ふ、是何ぞ吾が憂と爲るに足らんと。其の親ら其事を履むに及べば則ち色を喪ひ膽を落し、張々遑々として之を措くこと莫し。殊に知らず張々遑々たる者の徒らに自ら苦む耳、造化已に之を定む。善哉康節が言に曰く、能く言ふは是れ眞の男子にあらず、善く處るを大丈夫と爲すと。君子の濁世に生るゝ誠に善く處

る所以を思はずばある可らず。

○

君子は己の長を以つて人の短を露す可らず。然れども天地の間長短齊しからざるは物の自然なり、蕞爾の軀豈に能く事々にして長たらんや。必ず己の長を炫つて人の短を露はさんと欲するは則ち跬歩にして仇と成る、何ぞや、諱むらくは己の短より諱む事は莫し、樂は人の短を掩ふより樂しきは莫し。彼、既に、吾が、短を、揚ぐるを、憾みざるものは、千百人に一人耳。然らば則ち人の短を言ふ者は、之れ禍を種ふると謂つ可し。

○

欲心重き者は富貴の地に處ると雖、未だ嘗て須臾も憂ひずんばあらず、何ぞや、位高き者は多く子無きが爲に其心を累はす、才高き者は多く位無き上は則ち子無きが爲めに其心を累はす。天地の間萬物の齊からざる、彼れ屈すれば此れ伸び、此有れば彼無は自然の理なり、

必ず其心の慾を全ふせんと求むる者は、則ち敝々乎として百歳の間須臾も憂ひずと云ふこと無し。

○

險人の前には人の陰私を語る可らず、奸人の前には人の機巧を語る可らず、我れ一時に之を言へば彼れ一時に之を聽く、之を言ふ者の固に難しと爲さざるも彼の之を聽く者の之を心に蓄へて忘れず。險者は其陰私を資つて以て訐の本と爲し、奸者は其機巧を用ゐて以て利の基と爲す物を損し理を害するの甚きにあらずや。物を損し理を害するを解かずと雖も、亦薪を抱いて火をとり、水を障へて潮をとり、人の宅を焚き人の田を沒する者の如し。吁此れ仁者の深く戒むる所乎。

○

大自を慚ぢざるは此れ學者の大病なり。夫れ人は至愚なりと雖、是非の心は恥ち皆有り、或は憤りに乘じて以て人を慍り、或は喜に因て衆に誇る、殊に人は言ふこと無しと雖も而も默て胸中に輕笑せんことを

知らず。

○

貴人の前には窮を言ふこと莫れ、富人の前には貧を言ふこと莫れ、是を以て群賢の中淡然漠然として謹默に付せば可なり、窮や貧や皆な命なり。人に告げて脱す可き者に非ざるなり。或は心に得ざること有るときは、言を咏歌の間に寄せて性靈を陶寫せん而已。

○

士君子は其の胸襟を大にせざる可らず、胸襟を大にせざるときは、則ち一日の内一歳の間、役々として聲利の場に閉捷す、之の如きは何として樂しきや、蓋有限の身を以て混ずるに無窮の欲を以てす、之を此に得て之を彼に失す、強ひて兩つ乍ら其欲を全ふせんと欲せる上は、則ち慘然として不如意の憂有り、望々焉として之を求むれども得ず、僕々焉として之を購ひれども方無し、愈憂ひて愈苦しまん、能く釋く

こと莫し、是故に六合を以て一己と爲し、壞冶を以て一陶と爲す者は、則ち往くとして樂しまずといふこと無し。

○

客有り余に問ふて曰く、順境に處るは易く、逆境に處るは難しとは信乎。余曰く兩者俱に難し、惟り智者のみ之に處るときは則ち難きこと無し。順境とは人の縱にし易きの時にして、之を縱にして己まざれば則ち天其の魄を奪ふ、故に曰く小人福薄しと、福過ぐれば禍生ずるなり。逆境とは動作悔有るの時なり、之を悔ふること痛切なれば則ち天之を佑く、故に曰く弔する者門に在れば慶ぶ者閭に在りと。是故に順境に處て懼るゝ事を知り、逆境に處て憂を知らば則ち禍患及ぶこと能はず、上士は達して憂無く下士は怨にして憂無し、憂の種る所正に中人に在る乎。

○

恕の一字固に仁を求むるの要たり、量の一字又た恕を行ふの要たり、

能く恕有つて量無き者は有らざる也。亦た量有つて恕無き者有らざる也。是故に恕は勉む可しと雖も量亦學ぶべき多し、杯盂の量有り、池沼の量有り、江海の量有り、天地の量有り、天地の量は聖人なり、江海の量は賢人なり、杯盂の量は小人なり。喜び易く怒り易き者は小人なり、予へ易く奪ひ易き者は小人なり。未だ滿たずして先づ盈つる者は小人なり、未だ富ますして先づ富める者は小人なり。中人は則ち寛有り狹有り、賢人は寛多くして狹少し、聖人に至つては則ち萬物其志を撓ること能はず、日月と其明と同ふし、鬼神と其德を合す。蕩々熙々として容れざる所無し。然らば則ち量を學ぶの功、何れか先にせん、曰く理を窮めん、理を窮むるときは則ち明かなり、明かなるときは則ち寛し、寛なるときは則ち恕、恕なれば則ち仁なり矣。

○

東坡が言に、人心は眞に縱放にす可らず、閑散既に久しければ毛髮許の事も便ち自ら堪へずと。誠なる哉是の言や、余平日の病正に此に在

り、少より書を讀むを以て業と爲し、只筆を把て之を攻むるの外、世事茫然として知らず、總に毛髮事有るときは、則ち蹙々として自ら寧んぜず、蓋し懶惰の害や此の如し。陶侃は豪傑の士なり、朝に百甓を齋外に運び、暮には百甓を齋內に運ぶ、豈其心を用ゐる所無からん哉。正に以て人心一つも懶るときは百骸倶に怠る、百骸倶に怠るときは則ち心日に荒んで萬事廢す可きなり。

○

老子は動もすれば輒ち嗜慾を絶んと要す、男女、飲食豈に絶つ可んや、但彼を以て心を累はさず、之を節する而已。孟子曰く、其れ人と爲るや欲寡きときは存せざる者有りと雖寡しと。之れを寡しと謂ふときは則ち可なり、之を絶つと謂ふときは則ち未だ可ならざる也。

二　處世箴

坊間行はるゝ所「人言艸」なるものあり、處世の箴を示して肯綮に中

る、請ふ言の卑近なるを咎めず、以て反省の料とせよ。

一、家は金殿にあらずとも、もらざればよし。

一、衣服は錦にあらずとも、暖かなればよし。

一、食物は珍味にあらずとも、ひもじからざればよし。

一、妻は色あらずとも、かしこきがよし。

一、貧なりとも心清ければ、常にたのしみあり。

一、富ても心濁れば常にうれひあり。

一、人のいふ非のうちに理あり、又理のうちに非あり、細かに察せずんばあるべからず。

一、上手なる醫者のあやまちは稀なり、稀なる過を以て下手といふべからず、智者のあやまちは稀にあるものなり、愚者は一切の事にあやまらざるはなし。

一、何にもあれ道こそ尊ぶべきなり、たとへ其人はいやしくとも、其道ある人はいやしむべからず、一本の木にて、一つには佛を

つくり、一つは足駄を作るに、佛は尊まれ、足駄はいやしまる、其木はもと一つなり、何ぞ貴賤の異なることやあらん、道ある と道なきの差別なり。

一、大德をすてゝ、大損をするたぐひ多し、たとへば一字千金にあたる學問する際はなしといひて、身をほろぼすあそびには、何ほども日をつひやし、書籍をもとむべき價はつひへなりといひて、我が好む惡事には金錢をおしまず、未來をたすかるべき善行をすてゝ、身をくるしむる貪欲をなす類なり。

一、我が好む食事にて必ず脾胃をやぶり、病を生じ命をちゝめるなり、我が好む業には氣をくるしめ耻をかき、身をそこなふ事多し、我が好む業には、念を入れて氣を付くべし。

一、行きてよかるべきか、ゆかでよかるべきかと心の內定まらぬ時は、ゆかぬ方がよきになるものなり、極めてよきか極めぬがよきかといふ時、きわめぬがよきになるものなり、心のうち一途

に落つかぬ時は、とかく止むる方にすべし。

一、命は泰山よりも重くすべし、然れども時に臨んでは禮の爲に身をくるしめ、仁義のために命をすつること、鴻毛よりもかろくすべし。

一、人の惡しきを、名をあらはしていふべからず、人の譽誇るをまことにすべからず、又いつはりとのみ思ふべからず、人の言葉を用ゆれば、我に向ひて讒言虚説のたへぬものなり。

一、少し惡敷ことありとて大に用に立つ人をすつべからず、六ッ用に立つことあらば四ッは氣に入らざるも堪忍すべし、萬によきはなきものなり。

一、うそに似た誠をかたるべからず、又誠に似たうそ有るものなり、智者の言をもうけがはず、愚者の言をもすつべからず。

一、人にあひたる時は、その人に用ある事どもを案じ、まづいひ、後につひへたる物語をもすべし、のちに用事をいはんとすれば、

あるひは忘れ、又は人來りて、いひにくき事あるものなり、

三　自然の趣味

自然は人生の慰安者たり、吾人は之れに由りて深き教訓と清き趣味とを養はる、グレーいはずや、

谷間に咲ける名もなき艸花も、木の間にそよぐ風の音も、日の光も青空も、我には天國の心地こそすれ

と、山水自ら清音あり、仔細に自然を觀察するの時、吾人は這裡に不言の感化を受く。

○

禪家、山水によりて教を説くこと多し、彼れは此不言の感化によりて不立文字の大説法を示さんとするのみ。白隱禪師は宇宙を以て無字の大經卷とし、偈を作つていふ、

畢波羅窟裡　　末結集此經

童壽譯無語

阿難豈得聽　北風窓紙隙　南雁雪芦汀
山月苦如瘦、　寒雲凍欲零　千佛縱出世
不添減一丁

と、宇宙は實に千佛も一丁を增減する能はざる大經卷なり。左に禪家常套の句四五を擧げむ。

松無古今色　竹有上下節

現成公案、其性を違せず。

掬水月在手　弄花香滿衣

意は觸る處に隨て相離れず、梁人陶弘、華陽に隱居す、人あり之に問て曰く、山中何の有る所ぞ、弘詩を賦して答へて曰く

山中何所有　嶺上多白雲　但可自怡悅　不堪持贈君

自然の妙趣、唯だ獨り會すべし、焉ぞ持して人に贈るを得む。

一夜落花雨、　滿城流水香

流水もと心なし、香雨に遇ふて初めて香し、

汲水疑山動　揚帆覺岸行

山動かず岸行かず、行くものこれ誰、動くもの何人ぞ。

幽鳥語喃々、　辭雲入亂峯

雲はこれ向上、峯はこれ向下、向上より向下しきたりて、禪機眞なり。

豈知潭底月　元在屋頭天

迷へるものは遂に天を見ず、知れ、

月落潭無影　雲生山有衣

を。

風吹不動天邊月、　雪壓難摧磵底松

修して此に至て初めて妙、

昨夜金烏飛入海　曉天依舊一輪紅、

金烏に出入なく、誰か海に入るとするものぞ。見よや

芭蕉葉上無愁雨　只是時人聽斷腸

を、

桃紅李白薔薇紫、　　問著春風總不知

○

詩歌の趣味も亦自然美に接觸してます〳〵興趣の深きを覺ゆ、悠然山に對して靜に詩を誦し、江畔に逍遙して獨り歌を咏す。

必ずしも絲竹に依らず　山水自ら清音あり、

ひゝきくる松のあらしに埋もれて

たえまかちなる谷の水音　（芦庵）

夏川の音に宿すて木曾路かな　（重五）

無數山蟬噪夕陽、　高峰影裏坐陰涼、

石邊閑看清泉滴、　風過微聞松葉香（徐璣）

若し夫れ書を讀むで

莫道幽人一事無、　閑中儘有靜工夫、

閉門清晝讀書能、　掃地焚香到日晡、（呂巖）

或は

席簾高捲枕高欹、　門掩垂羅蘸碧溪、

閑把史書眠一覺、　起來山日過松西（處默）

誦して自ら清風裡にあるの感あり、夜深く人なく

細字燈前老不便、　小齋新冷夜無眠、

數聲牆竹蕭々雨、　一縷銅爐淡々烟、（祖皋）

閑寂の境、轉た心神を清からしむ。

風攪飛泉送冷聲、　前峯月上竹窓明、

老來殊覺山中好、　死塵嵩根骨也清、（寂室）

風韵、仙に似たり、彼の

黑雲飜墨未遮山、　白雨跳珠亂入船、

卷地風來忽吹散、　望湖樓下水如天、（東坡）

に至ては眞に一服の清涼劑たり。

夕立や川追ひあぐる裸馬　（失名）

夕日さす外山の雲は晴にけり　あらしに過ぐる夕立の空　（良經）

夕立の雲は外山の末こえて　すゞしくのこる松の聲かな　（勝繼）

○

清瀧や波にちりこむ青松葉　（芭蕉）

ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音　（同）

とう〳〵と瀧の落ち込む茂りかな　（士朗）

石工の鑿冷したる清水かな　（蕪村）

僅かに十七字、しかも心裡涼風起るの感あり、

○

佐藤一齋の言志錄にいふ、

仰で山の厚重にして遷らざるを觀、俯して水の汪洋として極りなきを觀、仰で山の春秋變化するを觀、俯して水の晝夜に流注するを觀

仰で山の雲を吐き烟を呑むを觀、俯して水の波を揚げ瀾を起すを觀、仰で山の其頂に巍隆するを觀、俯して水の其源に遠疎なるを觀る。山水心なし人を以て心と爲す、一俯一仰、敎にあらざるなきなり。

と、山水以て吾人を啓發すべし。

○

自然を觀じて其興趣を味ふ、よし詩歌なきものも心に詩趣歌想なからんや。明の謝在杭いふ、

風、樹を拂つて則ち天籟鳴り、水、石に激して則ち飛湍咽ぶ、夫れ天地心なく木石情なきを以てするも、一たび感觸に遇へば、猶自然の音響節奏あり、況んや人に於てをや、

と、

○

蘇東坡が

谿聲便是廣長舌、　山色豈非清淨身

の句は自然を達觀するものとして激賞せらる、劉升卿の之れを祖述して

鈴聲廣聽無邊法　山色長存不壞身

とせるも亦坡に愧ぢざる絶唱なり。

○

旅行は以て自然の美を味ふべし、禪家に行脚を要とし竹杖草鞋心身を雲水に托せしむるもの豈に偶然ならんや、貝原益軒か岐蘇路記の序にいにしへの人、一日の勝に遊べば一日の神仙となるといへれば、わがおろかなる心のけがれも、浮世の塵も、日頃經て佳境を過ぎ行く程に忘れぬ。生きて堯舜の仁にあひて嶺南の遊をなすことを得たりと、東坡がいへる如く、大君の御めぐみによりて、太平の世に生れ、此樂を得ることいとめでたし、遊は其一時のながめのみかは、身を終るまで折々に其所〳〵のありさまを思ひやれば、又目のあたり見る心地して長き思ひ出となる

と、

○

予曾て紀の熊野に遊び、左の記を作る、

山神、赫として怪岩を率ゐて陸の南端紀の一角に據り、海神、怒濤を從へて陸を侵さんとし、太洋の潮を集めきたりて之れに中り岩は飛んで海底に出沒し、濤は狂ふて斷崖を削り、山中の水は遙かに海潮に應せんとして直下數千丈、時に倒に白絹を懸るが如く、時に飛沫玉の如きを吐き、海中の島嶼は又遠く岸角の石壘に通せんとして、水底より屹立し、山鳴り海嘯き、天黑くして魑魅罔兩之れに乘じ、雨白くして惡鬼夜叉の跳梁に便す、勝てる陸は潮の岬となつて海中に突出し、敗れたる岩は橋杭の亂礁となつて狂瀾の飜弄に任せ進める海は深く陸地に灣入し田邊勝浦の港となり、囚はれたる水は山又山に圍まれて碧潭永く靜の勝となる、逃れんとする水は右に激し左に撥ねて潺湲の響を爲し、止めんとする巖は傲然行くてを遮りて重

壁、中に千古の水を湛へ、永劫の其昔、水と岩との戰ひを今目のあたりに現出するものを熊野海岸の光景とす。若し夫れ二鬼嶽、三鬼、九鬼、八鬼山、鬼の本、鬼が城の名、尙ほ存すると思へば、夜叉罔兩の隱れ家も、彼處の森か、此處の窟か、紀は鬼なり、夜の熊野の、さても怖ろしき。

予が七日間の講習會を終りて熊野の倫敦と評されたる新宮を出でたるは午前九時の頃にして、それより海岸づたひに或は青松白沙の中を、或は丘陵起伏せる苔の細道を、登る時は先曳の犬に助けられ、降る時は魂も消ねんばかりに車を走らせて、三輪崎より那智山下補陀洛寺の邊に出で、右折して下里村に向へば山路崎嶇として一徑尽きて一徑生じ、下瞰すれば急流の岩に激して霧の如く又雪の如きあり、仰げは斷崖の崩れ落ちなんとするに藤の花の咲き誇れるあり、後へに韡韡の響あるはこれ那智の瀑聲にして、近く急雨の聲あるものはこれ夏蟬の早や涼を呼ぶなり

山漸く開きて柳陰に板橋あり、橋下の水は繞りて田より田に傳はり、鄙歌のぞかに早苗植ゆる少女が足を浸す、行通ふ燕に袖を縫はれつゝ午后二時門前竹三竿、屋裏柑樹茂れる禪刹に着しぬ、此處と村の小學校とにて演說を終り、夜十一時、俥を驅りて西に向ふ。

廿日の月は早や峰の松が枝に懸りて晝よりも明かに、道は海岸に出づれば、金波漾々として浮び、波は黙々たる亂礁に狂ふて、夜目にも白く、風は磯馴れ松を弄びて、俗腸を洗ふ、岸を離れて懸崖逼り月前山に隱れては四顧晦冥、唯だ濤聲と風聲との相和するを聞くのみ、黑く茂れる山の端に白く笑める百合の花は却て寂寥の情を增し、道のへに飛ぶ螢の光さへいと物凄きに、一聲高く血を吐きて過ぐる杜鵑は轉た旅愁を深からしむ。急坂を下れば眼界開け、遙に明滅せる燈臺の光を左に、迂餘幾十回終に古座町に著し漁船を問へば、今宵は風浪荒くして此處には寄せじ、串本まで行きたまへといふ則ち舟子を傭ふて古座川を渡り、又西して串本に向ふ、漁火兩三點、大

嶋あたりにほの見ねて、月は二たび海上を照し、鬼神の企てなりと傳へらるゝ橋杭の勝は眼下にあり。

時に一聲の滝笛と共に入港し來れるものは予が乘らんとする那智川丸なり、道は熊野には比ひなき坦路なり、犬は疲れたれども、車夫は屈强の若者急げ、乘り遲れては夜を徹して來れる甲斐なしと、二里の行程僅に三十分にして達し、船に乘れば月は雲に掩はれて今まで晴れたりし空の黑くなりゆき風さへいとゞ加はりぬ『岬は大分荒いだらう』『さうです、今日は少し荒れますぜ』『さうか』と毛布被りて打ち臥しぬ、風浪ます〳〵激しく大地も動がんばかり、山神海神今も爭へるか、臥せる予も或る時は九天の上に朝するが如く、或る時は奈落の底に沈むに似て胸安からざりしかど、幸に疲れたる予は架上の物の墜落したるも枕の飛びたるをも煙草盆の覆かへりたるも知らずに昏々として睡りぬ、覺むれば船は田邊の港に入りて靜かに錨を下しぬ、海には激浪あり、陸には峻嶽あり、熊野の地は行くに

惱み多けれど、天下の勝景これに過ぎたるはなし、歸來曾遊を想へば水容山態恍として眼に在り。

○

熊野の景の奮鬪的なるに反して平和の情趣を認むべきは瀨戸内海の光景なり。七里七嶋、五里五嶋、三里三島に一里一と嶋と歌はれし藝備の島々を縫ひ、遙かに豫の大三島、岩城嶋等の青螺を數へつゝ尾の道港の纜を解きしは、暑氣ひと烈しき七月の末なりき。

一碧遠く連りてろよとの風も吹かねば水と陸とは穩かに守るべきを守りて岸を侵すの水もなく、海底に怨を呑むの岩もなく、白帆其間を去來して櫓聲の唯だ靜寂を破るあるのみ、人は其美を賞ふれど我は其單調なるに飽きて睡るともなしに眠りつゝ安藝の三津に着しぬ。

三津は海岸の小都會、後に積翠疊々の山を負ひて前に此海を擁し、大長、桃嶋、間の嶋等皆な一水盆上にありて指呼應ずべし。時に船を浮べて芦荻の間を過ぎれば行々子の聲は欸乃の聲と和し、時に晩

凉を追ふて隴圃を逍遙へば、一螢飛んで我が袂に入る、熊野の景の豪宕なるに比して此處の景は纖細なり、彼れの崇高なるに比して此れは優雅なり。

居ること五日、風神水陸の睦しきをや嫉みけむ、黑雲天の一方に起り銀箭長く屋根を射て一點二點、見る〳〵天暗く風荒れて雨は車軸を流すが如く、風聲先づ濤を打ち濤聲陸を襲ひ、水と陸との歡會も今は破れんとし樓下に難を避くるの船集ひて屋後の樹に枝を折るの聲あり。『近年にない大荒れです』『沖には難破船もあつたでせう』。されど長へに契れる水と陸とは永く風神の跳梁を許さず、明くればもとの靜穩に歸して東の空に輝く日の光は雨後の翠を照らし、白帆又青螺の間をゆきかひぬ。予も亦身を小蒸汽に托して二び瀨戸海上の人となり、平相國が偉業を今に偲ばるゝ音戸の瀨戸を横ぎりて吳港に入れば市街は昨夜の嵐に荒れて街頭の樹は折れて二川の橋さへ墜ちてありぬ。

吳より船を更へて伊豫の高濱に向ふ、一線碧瑠璃を破りて西は遠く周防灘を隔てゝ防長の山を雲烟模糊の間に認め、東は幾多の島嶼を挾みて遙かに播磨灘に連る殆ど瀨戸内海の中央を横斷し、昨は北より眺めし景を今は南より望めばいづれをそれと見分かぬ島々に立つ烟もひと濃かに四十島の岩角に一本茂れる常盤木の綠深きも趣を添えぬ陸に上れば鐵路翠微の中を行くこと里許道後の湯に遊べば花崗石を以て罩める浴漕也迸る湯は清澄にして俗腸を洗ひ、復び高濱に出で、纜を解きて西せば右手は渺茫として眼を遮るなく一扶の雲と見ゆるはこれ内海の咽喉文字の關なるべく、船は伏田岬に添ふて佐賀の關に出れば、水と陸との和はこゝに限られて潮勢又内海の穩かなるに似ず、波も亦漸く大に、岩を洗ふ飛沫の雪に似たるあり、八幡濱に船を棄てゝ青嶂壁立せる丘上の禪刹に書を講ずること五日、更らに南方宇和島に向へば水と陸とは倘ほ古の戰ひを殘して波漸く荒し。歸路は陸に添ふて伊豫の海岸を一周して讃岐の海岸に及び、多度津、

高松を經て播磨灘に出れば陸と陸との間隔りて風伯其間に乘じ、海波時に怒ることあるも、中に小豆嶋の調停ありて、水を隔てゝ青松白沙相對し、志度の浦邊の風光は、須磨明石と其勝をや競ふかと思はれ、瀬戸内海の優雅はこゝにも詩人を欣ばしめぬ。阿淡海峽に鳴戸の勝あり、勢ひ込むで入り來る太洋の水はこゝに止められ渦紋長く内海の平和を守りて幾千代かけて我が内海の美を守りぬ。

讀書と自然了

明治四十年八月十五日印刷
明治四十年八月十八日發兌

人格之養成奥附
不許複製
定價金五十錢

著者　加藤熊一郎
發行者　伊東芳次郎　東京市本郷區本郷壹丁目九番地
印刷者　河合辰太郎　凸版印刷合資會社代表者
印刷所　凸版印刷合資會社　東京市下谷區二長町一番地

發行所　東京市本郷區本郷一丁目九番地　郵便振替貯金口座一七二番　電話下谷一九三八番　東亞堂書房

大賣捌
【東京】
蕾山房　北隆館
東京堂　東海堂
上田屋　林平
前川文林堂
至誠堂　二松堂
【市】
【大阪・京都】
吉岡寶文館（名古屋）　川瀨代助（熊本市）　長崎書店
杉本書店（同市）　星野文星堂（大分市）　甲斐治平
松村文海堂（同市）　三輪玉潤堂（廣嶋市）　積善館支店
若林書店（久留米）　菊竹書店（高知市）　宮脇開益堂
寶文館支店（博多市）　博文社書店（和歌山）　宮井宗兵衛

加藤咄堂君新著

近刊

雄辯法

全一冊（起稿中）

苟も加藤先生の大名を耳にするもの、誰か其絶倫の大雄辯を聯想せざるものぞ。本書は即ち今デモセニースの稱ある先生が、其多年の實驗を基礎として、現代志想表彰法の重要手段たる、演說、講話、座談等の要訣を道破せられたるもの。先生にして雄辯法を說く、以て其尋常の俗書に非るを知るべし。刊成るの日や、速に一本を繙いて、時代の進運に遲るるの悔ひを招き給はざらんことを。

黑岩周六君序

高評八版

冥想論

加藤咄堂君著

戰後我國は一躍世界の大舞臺に一大蹈歩を試み、國民品性の修養を要する今日より急なるはなし、本書は著者が該博の識と流麗の筆とを以て、品性修養の根底たる冥想を各種の方面より論究し、獨坐靜思の快感を說きて、其理論と方法とを詳叙し、進んで禪の奧秘を闡明して、膽力養成の法に及ぶ。加ふるに冥想雜感の一篇は、實に君が半生の思想史とも稱すべき物にして、奇想縱橫、趣味滿幅世の修養に志あるの士本書を讀まば曉悟する所必や大ならむ

▲菊判全一冊…新式美術的奇裝…定價卅五錢…郵稅六錢▼

幸田露伴君序

高評再版

朝思暮想

冥想雜感

加藤咄堂君著

朝に思ひ、暮に想ふ。朝に思ふの時には希望のほゝゑみあり。暮に想ふの時、誰か追悔の涙なからむ。本書は咄堂加藤氏が、行住の間、冥想の餘、事に屬し、物に擬し、深刻の同情と、高遠なる理想とを寓して、吾人が修養處世の妙諦を指示せられたる物。其詞藻の華麗なるは、燦として宛かも百花の芳を競へるが如し。之を現代文章の模範と稱するも亦盛美の言にあらじ。苟も文を談じ、修養を口にするの士は坐右一本を備へざるべからず。

▲金二冊…定價各冊卅錢…郵稅各冊四錢…合本上製七十五錢…郵稅八錢▼

新刊

奇聞逸話

話し草

加藤咄堂君著

九月上旬發賣

本書は加藤先生が吾人が趣味性の啓發を旨とし、其該博超凡の識を以て、古今に亘り、東西兩洋に及びて、興味ある諸種の奇聞逸話を蒐集し、之を行るに君が輕快渾逸の筆致を以てせられたるものにして、一讀抱腹絕倒に堪へざらしむるものあり、肅然として襟を正さしむるものあり、又凜然として中夜馬を天山に騁るの志を起さしむるものあり、娛樂の裡に教訓を與へ、談笑の間に天來の氣呵に觸れしむ。人格修養の餘師として又文章演說の材料として將た又社交の談柄として眞に机上の好友、袖中の清涼劑たるに背かず。

▲袖珍全一冊…体裁瀟洒…定價　錢…郵稅　錢▼

好評八版

動中靜觀

在米國茅原華山君著

渡邊國武氏題詞
黑岩周六氏賛論
佐々木信綱氏題詠
三宅克己氏畫
齋藤松洲氏畫

華山先生の文は世既に定評あり西園寺陶庵侯は『恰も蘇老泉の文を讀むが如し』と稱せられ渡邊無邊老俠は『山淺間、物産生絲、湖水諏訪、文章華山、武官福島』と謳はれ而して黒岩涙香先生は實に『其趣味の博きこと時人及ぶ者少し』と賛論せられたり本書は先生が半生の思想史にして又觀察史也篇を分つこと八其趣味の多樣なる其文詞の流麗なる近時出版界の一異彩たり敢而大方の瀏覽を俟つ。

▲洋裝全一冊…三百二十餘頁…定價四十錢…郵稅六錢▼

好評再版

時文評論 理趣情景

角田劍南道士君著

德富蘆花君序

健實の想、莊麗の文、現今文壇評論家の泰斗として、よく理を盡し、情を察するものは、實に我劍南道士に非や本書は君が、社會、文藝、思潮、人物等に關する獨特の評論に、自然、人生、美術、哲理等に對する隨時の感想文、美文等を加へ、風雲の氣、兒女の態兩つながら併せ得たるものにして、近時文壇の大勢を知らんと欲する者の看過すべからざる快著也。

▲洋裝全一冊…体裁閑雅…定價四十錢…郵稅六錢▼

好評再版

賜天覽 瑤琴

龜谷天尊君著

宮內大臣田中光顯氏題字
子爵渡邊國武氏手簡
故原抱一庵氏序

本書は天尊龜谷氏が、其該博超凡の識を以て、宇宙の萬象を達觀し、ろが胸裡の琴線に觸れて流露せし筆の跡を輯めて高雅なる一冊子となし畏くも聖上皇后兩陛下乙夜の覽に供し奉りたるものにして、詩歌あり、紀行あり、漫錄あり、日本新聞は「苟も天尊を知らんとするものは必ず一讀すべき文字なり」と稱し、毎日新聞は「讀者をして感殆ど窮りなからしむ」と言ひ、二六新聞は「野趣饒き文字もありて頗る多方面なり」と評せり。

▲袖珍全一冊…五百餘頁頗美製本定價四十五錢…郵稅六錢▼

文學士武島羽衣君序

好評再版

作歌の栞

慶應義塾普通部國文科教師 志賀華仙君著

武島先生の序に曰く『細やかにして煩はしからず、心得易くして卑しきに流れず、この道の隈々人の迷ふべき所々を說き明らめたるは、げにをぢろげならぬいたづきとやいはまし』と、又讀賣新聞は『叙述簡略初學者の好參考書也』と評せり。

▲新形全一冊…体裁優美…定價貳拾五錢…郵稅四錢▼

東京開成中學校國語及漢文講師

新案 百人一首通解

佐藤仁之助君著

◉寸珍新形体裁典雅◉

小倉百人一首を、頭字に據りてあいうえれ順に排列し、どくわかり易く解釋した。百人一首を覺えるためにも、亦和歌を習ふ人の參考にも至つて便利な可愛い本！年末歲首の御進物用などには、外に類なき適當品です。

▲全一冊壹百餘頁……定價十錢……郵稅參冊迄貳錢▼

東京開成中學校講師國文法專攻

新刊 日本文法解義

佐藤仁之助君著

●本文六號活字最新式印刷●

本書は佐藤先生が、從來文法書の徒らに多岐多樣にして煩瑣にのみ流れ、善く要を撮り、綱を携げ、一讀直ちに其要領を會得して實際の活用に資するもの鮮きを慨し日常教授の實驗を基礎とし數年間に溯りて慘憺の經營を費され上の結果從來に類例なき新式を以て編纂せられたる新著たる結果に各種專門學校入學試驗問題并に教員檢定且附するに一々其解答の方法を示されたれば之を以て試驗問題を又中學上級及び補習用等と受驗準備の參考書として、將た一冊……紙質佳良……定價四十五錢……郵稅四錢▼

洋裝全一冊……紙質佳良……定價四十五錢……郵稅四錢▼

しして參考せられなば勞少くして得る處必や多きを得む。

東京開成中學校國語及漢文講師
佐藤仁之助君著

受驗
參考

國語漢文要語詳解

◉合本特製 定價壹圓 郵稅十二錢◉

本書は文學博士黑川眞頼先生の高足として、國語漢文言語學等の造詣深き佐藤仁之助先生が、從來東京開成中學校に在りて、本科目の教授を執られ、傍ら、多年の實驗に基づき、各高等學校試驗問題及び教員檢定試驗問題等の參考に供せむため、特に數年の歲月を費し、博く各書を涉獵して諸君等の參考に供せむため、特に數年の歲月を費し、博く各書を涉獵して單語、成句、故事、熟語等の中、須要難解の語句を採り一々明快なる解釋を下されたるものなり、殊に國語之部の如きは、意義の解釋上必要なりと思はるゝものには其語原を註記し、尙其意義の變遷あるものは條を分ちて註釋し、更に書冊に徵して其文例を掲げ、且梵語等の外來語より轉じたるものには、すべて羅馬字を挿入して原語の發音を明にせし等、其用意の周到なる、從來江湖に散在せる此種の書類中未だ曾て其比を看ざる處なり、又學生諸子の排列は之をいろは順にして、幼時より「いろは歌」に慣らされたる毎語の索引をも附して、兩者孰れにても容易に撿索するを得らるゝが如き、如何に其便益の好著なるかを知るに足るべし。

▲國語の部……全一冊三百八十餘頁……定價四十錢……郵稅八錢▼
▲漢文の部……全一冊三百廿餘頁……定價廿五錢……郵稅六錢▼

東京開成中學校國語及漢文講師
佐藤仁之助君編

好評
再版

漢字異同辨及用法

本書は同訓或は同音にして其意義を異にする漢字の異同を辨じ、進んで一々用例を示して、懇切に應用法を說きたるものにして世の操觚の業に從へる諸君は勿論、日常作文の參考書として、萬人必携の寶典也。

▲寸珍クロース洋裝全一冊三百四十頁定價貳十錢郵稅貳錢▼

東京開成中學校國語及漢文講師
佐藤仁之助君校補

增訂
參版

國語異同辨

附假字用法及誤り易き動詞語尾區別表

東亞堂編輯所編

本書は國語の中に於ける同字同音の語句或は相似の文字にして其意義を異にするもの數千言を對照し一々懇切に其異同を辨じたるものにして斯學に於て堪能の聞え高き佐藤仁之助先生の嚴密なる校補を經且つ同先生の新案に成れる便利なる假字用法及動詞語尾區別表を附したれば國語研究者の參考として有益無比の良書也

▲寸珍全一冊……壹百九十頁……定價拾五錢……郵稅貳錢▼

◉假字用法及誤り易き動詞語尾區別表全一冊 此表のみ御入用の諸君には定價六錢郵稅八部迄貳錢也

東京帝國大學
東京高等商業學校
早稲田大學講師
大田學校教授

張宮澤
廷統文次

官話速成篇

本書は張統靈、宮澤文次郎兩先生が多年教授上の實驗に基づき支那語官話の教科書として編纂せられたるものにして一々張統靈先生の嚴父張廷彥先生の周密なる校閲を經られたる最新完全の良書也

▲洋裝全一冊……正價三十五錢……郵稅四錢▼

東語速成篇
官話速成篇總譯

官話速成篇の總譯にして一は以て清國人にして本邦語を學ぶ者の參考書たらしめんことを期したる物學者兩書を對修せば得る所更に饒からむ。

▲洋裝全一冊……正價十五錢……郵稅四錢▼

官話速成篇
附總譯

官話速成篇と東語速成篇の合本なり。

▲洋裝全一冊……正價五十錢……郵稅四錢▼

法學博士 梅謙次郎君序
法學博士 高田早苗君序

好評
再版
最近

學校評論

亞浪臼田卯一郎君著

學校は人材の搖藍也、志望の成否繫りて學校の善惡に存す。本書は則ち東京に於ける各種男女學校の眞相を正面より、側面より、最も大膽に最も精細に縱橫の論評を試みて學界を警醒し、學生を利導せるもの。時に親を滅し以て斬馬劒を揮ひ、時に諄々として成功の福音を傳ふ。眞に近來の快著にして又學藝修業者の新光明也。敢て滿天下の學生諸君幷に父兄諸賢に一本を薦む。

▲洋裝全一冊…貳百四十頁…定價四十錢…郵稅六錢▼

近刊

女子高等師範學校教授
國學院大學哲學館大學講師

日本新文學史

尾上柴舟君新著

全一冊（起稿中）